
ヴェルデロードで牧場生活を

雨根

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴェルデドロードで牧場生活を

【Nコード】

N3811Z

【作者名】

雨根

【あらすじ】

のほほん牧場オンライン『アクティブファーム』を満喫していた主人公。……って、いつの間にかリアル牧場に立ってマスヨ？ 原因も前後の記憶も状況もさっぱり。しかしどうやら腹は減る。なら仕方ない。悟った彼女はゲームの世界『ヴェルデドロード』の自分の牧場で、持ちキャラ『リコリス』として、ヘタレで性格の悪い相棒と、リアルなんだかゲームなんだかよく分からない牧場生活を開始する。*ゲームの仕様に沿った牧場生活になります。本当にリアルで専門的な内容にはなりません。

第1話 いっそ夢であれ

さやさやと気持ちのいい空気の中、彼女はぽかんと口を開けた。

目の前には青々とした葉を揺らす、見渡す限りの作物郡。その向こうの牧草地では牛がモーと鳴いていた。他にも羊や馬なんかも見える。

…なんて長閑な。じわじわと自覚を迫る緊張感さえなければ、暢気に動物たちと戯れていただろうに。

ぐるっと見回し、畑と牧草地の周囲に点在するいくつかの木造の建物は、今いる位置からは中を窺い知ることとはできなかった。だがなんのための建物なのか、わざわざ確認しなくても理解している。

今目の前にある風景だけでも、ここがどこなのか十分に確定できてしまった。畑の広さ、牧草地とその向こうに流れる小川、建物の見た目と配置。見覚えがありすぎるほど見慣れた風景だから。

大きく深呼吸して、恐る恐る顔を後ろへ。肩越しに見えた、丸太で作られた小さな家。これまた見覚えがありすぎて困るソレは、他と同じ木造建築でありながら趣が違う。当然といえば当然で、こちらが人が暮らすための家なのだ。

暮らす、といっても中にあるのは本当に最低限の設備で、キッチンとテーブル、イス、棚と小さなベッドだけ。本当は色々と増築したり、物を増やしたりもできたのだが、金と手間を惜しんでやらなかった。

そう。やらなかったのだ。他でもない、彼女自身が。

この家の決定権は全て彼女にある。家だけでなく、目の前に広がる畑も、牧草地も、動物たちも、全て。

笑えない。だって、

「——あはは。どう考えても私の牧場だよ……」

乾いた笑い声と青褪めた顔が、平和な牧場になんとも不似合いだった。

■
□ ■
□ ■
□ ■
□

『アクティブファーム』というオンラインゲームがある。

名前の通り牧場経営をベースに、RPGやらシミュレーションやら各種ミニゲームやら色々詰め込んだゲームで、しかしクエストやイベントの発生条件、装備条件はほぼ全て牧場の発展に由来する。プレイヤーはヴェルドラードという世界で一人一牧場を与えられる。通常プレイヤーの牧場は世界MAPとは独立したエリアとされ、各町にあるワープポイントから入場する。もちろん他のプレイヤーの牧場に遊びに行くことも可能だった。冒険に繰り出すより、誰かの牧場でたむろしているプレイヤーの方が多かったかもしれない。

しかしアクティブファームは普通のMMOだった。

パソコンの前に座って3D画面の中のキャラクターを、マウスとキーボードで操作する。間違っても頭にVRとか付いたりしてVRMMOとか、そんな夢の溢れるスタイルではなく、ごくごく普通のMMOだったのだ。というかVRMMOなんてまだ誕生もしていない。それこそお話の中のこと。

それなのに。嗚呼、それなのに、だ。

今のこの有様っていったいどういう訳だろう。自信を持って自分の牧場だと断言できるこの場所に、彼女は立っている。……否、シヨックと混乱のあまり地面に両手をついているので、立ってはいないけど。

掌に触れる地面のざらざらした土の感触は本物で、視界に入ってくる髪は燃えるように赤かった。

（あ、ヤバイ、なんか変な汗出てきた）

ガクガクと震える身体を叱咤して、顔を上げてみる。何気なく、すぐ目の前に植わっている苗に視線を置くと、ぺろん、と上に文字が出た。

「?!」

ぎょつとした。

現実そのものの植物の見た目に、あまりにも不釣り合いなデジタル文字。集中してみれば、

『

トマト

レベル：100

成長率：30%

状態：健康

』

これまた、彼女にとっては非常に馴染みのある文字情報だった。本来なら、農作物や動物にカーソルを合わせると、自動で表示されるものだ。

彼女は虚ろな目を周囲に巡らせた。先ほどは軽く眺めただけだった景色の一つ一つを少し長めに見つめてみる。

牛、羊、馬。名前、レベル、年齢、状態。家畜小屋。鶏小屋。水車。従来のゲーム通りの名称や説明を見てから、少し考える。

正直ゲームと違って操作方法はさっぱりだったが、おそらくは。

「えーと……【ステータス】？」

ばさつと紙が広げられるような、それでいてなんとなく機械的な音がして、目の前に何かが躍り出た。

「おお……出た」

目の前に現れたソレは、羊皮紙をかたどった3Dグラフィックだった。並んでいる文字は、書かれているように見えて、実は紙の表面に浮いている。

トマト情報の時にも思ったが、リアルそのものの視界に、半透明で触れない画面が共存しているのは不思議な感じだと、若干逃避している彼女の頭は思った。近未来を描いた作品などでは一般的だが、現代に生きていて実物を目にすることは多分ほとんどない。

羊皮紙には、こう書かれていた。

☐

リコリス

レベル：1000

牧場レベル：900

職業：妖精師

職業レベル：マスター

副業：プリースト神官

副業レベル：マスター

ボス名：フェアリーロード妖精王

以下略……

□

ゲームのままのステータスを確認して、今も視界の端にちらつく赤い髪を摘まんで眺める。

クローズドβ参加者特典、限定ヘアNo.8と呼ばれる髪型を真っ赤に設定して、その見た目からリコリスと名をつけた。ゲーム内でも名前の通ったキャラだった。間違いなく彼女がマウスとキーボードで動かしていたキャラだ。

そしてどうやら——今の、彼女自身であるらしい。

第2話 相棒がエンカウトしてきた！

リコリスは大きく息を吐いた。もう一度ゆっくりと吸って、吐いて。それから俯けていた顔を上げる。

「よし。考えても無駄だ」

わざわざ声に出したのは、自分に言い聞かせるためだった。

え？ 落ち着いてる？ 考えるのやめないと発狂しそうですがナニカ？

頭の中でよく分からない問答をしながら、リコリスは立ち上がった。膝についた砂をはたき落として、大きく伸びをして、また深呼吸。

とりあえず、家に入ろう。

色々と周囲を確認することに決め、彼女はまず生活の拠点となるであろう、『自宅』の扉を開けた。

「見事に何も無いなあ……分かってたけど」

外見も内装も素朴な木造建築だ。むしろ内装は素朴すぎるというか、質素というか……むしろ貧乏なの？ という有様だ。本当に最低限の設備しかない。そして狭い。

「まあ、貧乏は貧乏なんだけどね」

独り言が癖になりそうだと思う。だが喋っていないと頭が変になりそうなのだから、仕方がないではないか。

リコリスは狭い室内を横切って、部屋の隅にある簡素な寝台に腰を下ろした。何故か落ち着くのは、多分気の迷いだ。

寝台横にあったエンドテーブルの上に、鏡があった。キャラクター及び牧場作成記念に与えられる、最低限の家具一式の中のひとつだ。

手にとって、覗き込んだそこに映りこんだのは、ある意味予想通り、ある意味予想外の姿だった。

特徴的な真っ赤な髪は艶々と見事なキューティクルで、病的ではなく化粧もしていないのに白い肌。髪と同じ色の長い睫に縁取られた大きな目は緑色で、髪によく映えている。

キャラ作成した本人だ。特徴など改めて確認するまでもない、はずだった、のに。

「なんだこの美少女……」

ゲームで見慣れたと思っていた顔は、本物になると全く違って見えた。

要はキャラクターの特徴を丸ごと引き継いだ本物の人間なのだ。確かにゲームのキャラクターそのものの見た目であつたら、それはそれで不気味だが、逆にここまで美形にされると正直きつい。

そりゃ、美形は目の保養だし、美少女も大好きだ。リコリスだって、綺麗になりたいと思つたことくらいある。

しかし、持つて生まれた美貌でなく、努力で掴んだ美しさでなく、こういう状況で眩いばかりの美少女になりました、というのはなんというか……居た堪れない。そう。居た堪れないのだ。分かつてもらえるだろうか。無理！

リコリスは力なくベッドに倒れこんだ。鏡は適当に枕元にポイ。ぼへっと天井を見るともなしに見て、考える。これからのことを。

こうなってしまった原因はもちろん気になるが、今のところ完璧なノーヒント状態で、どうしようもない。

それよりもまず、目先のこと。

精神的ダメージによるところが大きい疲労感に、時間の経過と共にじわじわ来ている空腹感。作り物ではない。

ゲームと現実の混ざり合ったような周囲に、リコリスが設定したキャラクターの見た目で、本来の彼女ではなくても、この身体は本物なのだ。

それは、死にたくないなら、生きていくことを考えるべきだということ。

幸い、ゲームでリコリスが所有していた牧場はそのままのようだ。作物情報が表示されてはいたが、見た感じ、あのトマトは食べられる。後で齧ってみよう。

「……………知ってる人とか、いないかな」

贅沢を言えばプレイヤー。同じようにこの意味の分からない状況にはまっている人がいてくれたなら。

そこまで考えて、思い至る。

「そうだ。【フレンド】！」

思わず大きく響いた声に応えて、羊皮紙が広がる。先ほどのステータスと似ているが、こちらはフレンドリスト。ゲーム中、ログイン状態の相手は名前の前に花がつくのだ。

だが、期待を込めて上から下まで眺めても、花を咲かせた名前はひとつもなかった。もしかしたらフレンドシステムが機能していないだけかもしれない。あるいは、フレンド登録していないプレイヤー

ーなら同じ世界にいるかも。

どちらにせよ連絡を取り合う術はないが、全く希望を捨てる必要はない。リコリスは、必死に自分に言い聞かせる。

プレイヤーがダメなら、NPCはどうだろう。

ゲームの状態がどこまで反映されているか分からないが、リコリスの記憶通りなら、彼女の牧場は一般的なプレイヤー牧場と違い、独立エリアではなく世界マップに存在している。そしてそこは、ひとつの町のすぐ南の土地だった。つまり牧場を出て少し行けば、町があり、NPC——人がいることになる。

……いや、むしろいてくれないと困る。非常に困る。

知っている人がいないだけなら残念で済みますこともできるが、誰もいないのは大問題だ。遭難。無人島生活。いくらなんでも心が折れるわ。

（町に行ってみようか？ でも怖いな）

ごろごろとベッドの上を左右に転がって、リコリスは悩んだ。状況が普通でないだけに、かなり怖い。

知っているNPCがいるだろうか。いたとして、相手はリコリスをどう認識しているだろう。

『アクティブファーム』には、牧場以外にもうひとつ大きな特徴がある。それはNPCの数と個性だ。

世界中に散っている彼らは、名前を持ち、個性があり、過去が設定されている。ついでに大量のクエストを発生させてくれるものだから、必然、プレイヤーたちと深く関わっているのだ。

リコリスからすると、近くの町『スイエル』の住人たちは皆、名前も性格も知り尽くしたなじみの人々。だが、彼らが生身で生活し

ている現実には、いきなり入っていける自信がちょっとない。

できたらもう少し、小規模な感じで、そつと様子を伺ってみる感じがベストなのだけれども。

「あ」

ひとり。

ひとりだけ、頼ってもいいかもしれないと思える人物がいる。

存在しているだろうか。リコリスのことを知っているだろうか。相手はスイエルの町には住んでいない。牧場の近くの森の中に、小さな家を構えている。

こっそり様子を見にいくのはどうだろう。

いい考えに思えて、リコリスは勢いよく体を起こした。——と、ほぼ同時に。

扉が吹き飛んだ。

「……っ?!」

盛大な破壊音と衝撃に、小さな家がびりびりと振動する。ついでに鼓膜も心臓も揺れる揺れる。扉の破片がぱらぱらと足元まで転がってくるが、驚きすぎて声も出ない。

音の原因は探すまでもなかった。

視線の先、それまで扉があつたところに、男が立っていたから。

リコリスと同じ真つ赤な髪の方は、息を切らせて、切ないような思いつめたような顔をしていた。言葉にならない何かが、形のいい唇を震わせている。

これまた結構な美形だったが、それよりもその暗褐色の瞳から、彼女は視線が外せなかった。音にならなかった言葉の代わりとでもいうように、形容しがたい想いが暗い焰になって揺らぐ。

見ているだけで、ざわざわと胸のうちが騒ぐようなそれを、リコリスは知っていた。実際に、実物として目にしたのは初めてでも。

「——ライカ」

零れ落ちたのは男の名前。正式にはライカリス・オルジェノヴァ。彼はこのゲームの、リコリスにとって最も重要な、NPCだった。そして、こっそり覗きにしようとした相手。

向こうから訪ねてくれたのはある意味好都合……な訳がない。無残な扉が、リコリスの顔を引き攣らせる。ただでさえ物の少ない家なのに、扉さえなくなるとかどうなの。

名を呼ばれたのをきっかけにして、固まっていたライカリスの表情が動いた。泣きそうな顔のまま、花が咲くような嬉しそうな笑みを浮かべる。それはもう、蟲惑的といっているほど艶めいて見えて、リコリスは思わず息を詰めた。

「リコ……!!」

叫ぶように呼ばれたりコリスが答える前に、視界が塞がれた。走り寄ってきた彼が、勢いもそのままに抱きついてきたのだ。すっぴりと抱きこまれて彼女は呻く。

「ぐええ」

力が強すぎる。何しろ、木の扉を弾き飛ばした腕力だ。

（……死ぬ死ぬ）

色気のない呻き声がりコリスの口から漏れたのに、抱きしめてくる腕は全く緩まない。仕方なく、腕を回して背中を叩いた。手加減はしなかった。

「痛っ——痛いですよ、リコさん」

「私も痛いし苦しい！ 圧死させる気？！」

「久しぶりに会ったのにひどいです」

人を食ったような言葉遣いと久しぶり、の言葉にはたと気づく。

これは、状況はともかく、親しい友人との会話だ。

『アクティブファーム』のNPCには個々のプレイヤーに対して好感度が設定されていて、それはクエストやイベントなどで上下する。非常に非情にシビアな仕様だった。

好感度の上がり方はNPCそれぞれ違い、必要数値以上を稼ぐとパートナーとなる。狩りに同行してもらったり専用イベントがあったり、特殊アイテムが貰えたりと恩恵は大きいが、パートナーはお互い1人だけ。

既に誰かのパートナー設定されたNPCでは、一定数値までしか好感度を稼げない。また、パートナーを得たプレイヤーは、他のN

PCの好感度は同じく一定値まで。大体目安として、『親しい友人』止まりだ。

ちなみにパートナーとの関係は親友、恋人などのメジャーなものから、養子縁組、師弟、マニアックなものならパトロン^{パパ}、女王様と奴隷、飼い主とペット……など、様々に特別な関係がある。

目の前のライカリスは、好感度を上げにくいことと性格と口が悪いくことで有名だった。一応リコリスのパートナーで、彼女の親友。ゲームで培った関係がそのまま延長されているなら、少しだけ安心できる……か？ 癖がありすぎて若干不安な気もするけど。

しかし孤独からは開放された。今までは画面の中だった相手が目の前にいて、しかもやたら親しいという状態に慣れなければならないが、ひとりぼっちよりはずっといい。

締め付けていた腕の力も弱まって、色々ほっとしつつ顔を上げたリコリスは、そこで目を丸くした。

「ちょ、な、なんで泣いてんの？！」

透明な雫がぱたぱた。顔を上げたリコリスの頬に落ちてくる。ライカリスは微笑んだまま泣いていた。困ったように、でも嬉しそうに。

「えええ、似合わないすぎるでしょ」

「リコさんはひどすぎですよね」

「だって、あんたはもっとこう、ドライで意地悪で」

「……へえ」

対応に困って憎まれ口が口をつけば、潤んだ暗褐色の瞳に不穏な輝きが宿る。涙を流したままなのに、危険な感じがした。

それを認めて、リコリスは納得した。彼女の知っている、そのま
まのライカリスだ。

指先で涙を拭ってやると、ライカリスはため息をついて、その手
に顔をすり寄せた。

「……ずるい人だ」

甘えを多分に含んで零された言葉に、リコリスは笑った。実際に
誰かとこんなに親密にすることなど初めてなのに、平然としていら
れる自分が、とても不思議だった。

しかも、今までのお付き合いはゲームのプレイヤーとNPC、そ
れがなぜか生身で初対面したばかりという意味不明っぷり。なのに
ずっと一緒にいた親友同士のようなり取りができてしまうなんて
生きた人間として、大切な親友として、当たり前を受け入れつつ
ある自分の心の方に、リコリスは少し戸惑う。全然嫌じゃないし、
複雑だ。

ライカリスの目尻に残っていた一滴を拭いながら、思わずまじま
じと彼の顔を見つめる。

「あれ？」

扉吹き飛び事件と涙のインパクトのせいで気づくのが遅れたが、
記憶にあるゲームの画像よりも、大分頬がこけて見える。

リコリスとよく似た、でも彼女よりも少し暗めな赤い髪も、背中
の中ほどまであるそれを後ろで簡単に括っているのも、感情を強く
映す印象的な瞳も記憶のまま、特徴を引き継いでいるのに。ただで
さえ線が細かったのに、それに輪をかけて、その上顔色まで悪いっ
て。

リコリスは眉をひそめた。

「何か？」

ライカリスが薄く微笑んだまま訊ねてくる。涙はもう止まっていたが、その跡はまだ目元に残っていた。

「なんか痩せてない？」

「……………そうですか？」

妙な間があった。

怪訝な顔の頬を、指先でつついて、そのまま摘まむ。摘まむ肉があまりない。

「痩せたよね」

「いひやいれふ」

「っていうか、やつれた。ちゃんと食べてないの？」

これは気づかないフリができる範囲を超えている。心配くらい、させてもらう。

睨むリコリスの指を外させてから、ライカリスは肩を竦めた。

「死なずに動ける程度には食べてますよ」

なんだ、その微妙な返事は。

ライカ、と促せば目を逸らされた。

「……………2日に1回は食べてます」

「少なっ」

痩せるはずだ。

リコリスは目を丸くして、それから盛大に顔を顰めた。

「ダメでしょ、それは！ 倒れたらどうするのっ」

「倒れてませんし、平気ですよ」

答える声はため息まじりで、カチンとくる。

倒れてからでは遅いし、倒れてないから平気というものでもないだろうに。

「ああ、そう。確かに、人の家の扉吹っ飛ばすくらいには元気みただけだね」

扉を壊されたことは別に怒ってない。腹が立ったのはそのことではない。

皮肉っぽく言ったりリコリスにそっぽを向かれて、ライカリスは困った顔をする。

「——怒らないで……リコ」

その、縋るみたいな声と顔は反則だと思う。思うが、リコリスは腰に回っていた手を振り払って立ち上がった。

ライカリスはそれにひどく慌てた様子で彼女に手を伸ばした。

「い、行かないで」

私を置いていかないください。そんなことを真つ青な顔で言う。先ほどの涙といい、今の怯え方といい、何があったらこうなるんだろう。

なんとなく不安になりながら、リコリスは伸ばされた手を掴んだ。

「置いてったりしないわよ。あんたも来るの」
「え……」

リコリスが歩き出すと、手を引かれたライカリスは素直についてきた。ぽかんと口を開けたまま。

迷いなく向かった先は外。

見渡す限り青々としている野菜のうち、最初に見たトマトの前で立ち止まる。ツヤツヤで綺麗なトマトだ。

リコリスは掴んでいた手を離し、目の前のトマトを2つちぎると、そのまま牧場の横を流れている川まで移動した。持っていたトマトをその水で簡単に洗い、片方を齧ってみる。

うん。食べられる。それも、すごく美味しい。

「はい」

黙ってついてきていた後ろの男に、もう片方のトマトを差し出す。差し出された方は、瞳に戸惑いを浮かべていた。

「とりあえず食べて。トマト好きだよね？」

「ええと……はい」

「畑にあるもの、好きなの好きなだけいっちゃって。まあ生野菜ばかりもアレだから、後でご飯も作るけど」

だから、ちゃんと食べて、と。伝わったかな。

（これでも心配してるんだってば）

丸々としたトマトが、ライカリスの手に移る。口をつけるのを見て、ほっとした。

「——美味しいです」

「そう。それはいいんだけど、」

ほっとしたのも束の間。

「……なんでまた泣きそうなの？」

え、トマト美味しいよね？

第3話 異世界初日でまさかの……

明るい夏の空の下、空気の綺麗な森に囲まれた牧場はどこまでも長閑で。

それなのに川岸に並んで腰を下ろす2人の表情は硬い。

泣きそうになったライカリスを宥めて、リコリスは改めて彼から話を聞いていた。

「あなたが消えてから、この世界では2年が経っています」

2年前まではたくさんの牧場があり、管理する牧場主たちがいた。それがある日、突如として牧場主たちはいなくなり、彼らの牧場へのゲートは閉じて、リコリスのように世界マップに存在していた牧場は更地になったという。

突然、全て消えたのだと。

そう聞かされて、彼女は息を詰めた。

プレイヤーたちがこの世界にいない。それは、つまり。

顔を強張らせたリコリスに、ライカリスは静かに頷いた。

「世界中が大混乱に陥りました」

「そう、でしょうね……」

リコリスはこの世界のあり方を知っている。ゲームで遊ぶにあたって最初に目を通すストーリー、あるいはゲーム中で受ける説明で、故意に読み飛ばさなければ、目にする世界のルール。

この世界、ヴェルデドラードに生きる人々が日々得る食糧の約80%を、プレイヤーたちの牧場が担っていること。

都市と都市を結ぶ転移装置やを動かすのが、牧場で生み出される生命力であること。

ただのゲームなら、それはあくまでも設定だ。プレイヤーが減ったからといってNPCたちは飢えたりしないし、転移装置も止まったりしない。

しかし、今いるこの世界がゲームの世界と同じルールで動いている、本物であつたなら。生きた人々が暮らす実在するヴェルデロードだつたとしたら。

「……」

難しい顔で黙り込んだリコリスに、抑揚のない声でライカリスは語る。

「世界はあなたが動かしていました。だから、人々は必死で探しました。でも僅かな手がかりすらないまま」

取り戻したいもの、取り戻そうとしたものの欠片すら掴めないまま、時は経つ。人々に残ったものは、彼らとの記憶と、直前に収穫されていた農作物だけ。

そして、当然ながらその作物も減っていく。深刻な食糧危機を目前にして、人々は生活を優先しなくてはならなくなった。牧場主たちを探す余裕などなくなってしまった。

今では他の都市のことはほとんど分からない。転移装置が止まったのと同時に、都市同士の連絡回路まで閉じてしまって、お互いの情報が手に入らないからだ。

更には、狩る者がいなくなったことでモンスターまで増え始めて、隣町すら遠い。移動どころか、自衛で手一杯だという。

「……………」

（あ、頭痛くなってきた）

なんだその、最悪な状態は。

どう考えても、リコリスひとり戻ったからといって、改善される規模ではない。

「スイエルの町はまだマシな方です。クローグさんの農場があつて、海も森もあるので、他の都市より遥かに食料を得やすい。モンスターも弱いですし。私などは身軽なので、もっと楽でしたね」

「町の周りのモンスター、狩ってくれてたの？」

「ええ、まあ」

スイエルの町は、ゲームでプレイヤーが最初に降り立つ町だ。チュートリアルの要素が強く、牧場について指南するためのNPC、クローグ爺さんが小さな農場を経営していた。海と森の恵みも豊富だ。田舎で娯楽の少ない町だったが、今回はそれが幸いしたらしい。しかもライカリスがいる。パートナーNPCはそのペアのプレイヤーとレベルが揃えられるため、彼のレベルは1000のはず。どう考えても初期マップにいる強さではないので、彼が動いてくれていたならきつと大丈夫。

他の都市にもパートナーNPCは大勢いるが、そのどれだけが、ライカリスのように町を守ってくれているだろう。

戦闘向けとなると全体の4分の1くらい。非戦闘NPCはパートナーであってもレベルが存在せず戦えない。上位プレイヤーたちのパートナーは軒並み性格に難ありで、他人のために動くとは思えなかった。

リコリスは、彼女の仲間の廃人プレイヤーたちと、そのパートナ

―を思い出してみる。

(……うん、無理)

ぶっちゃけた話、ライカリスがスイエルの町を守っていたというのが既に十分驚きだ。

「町の人は全員無事です。よ。食べるものは多少減っている。節約はしているようですが、それ以外だと特に変わりはないはず。」

スイエルの町はリコリスにとって大切な町だ。ライカリスに勝る存在こそいないが、住人たちは皆友達だから。

「ありがとう」

心からの礼を述べたリコリスに、ライカリスは目を細める。

「いいえ。……あなたの大切な場所ですから」

「……………」

(すみません。すみません。失礼なこと考えてごめんなさい)

ゲームでのライカリスは人間嫌い、他人に対して氷の如しだったが、これではリコリスの方がよほど人でなしだ。罪悪感で胸が痛い。

「リコさん？」

「……なんでもない。ホントにありがとう、ライカ。……ごめんね」

「いいんですよ。多分、この人間嫌いが町を守ってるなんて驚きだ、とか思っているんですけど、謝らなくていいです。概ねその通

りなので」

返す言葉もございません。そして沈黙は肯定デス。バレバレですかそうですね。

ていうかそれ自分で言っちゃうってどうなの？

引き攣っているリコリスの顔を覗き込んで、ライカリスはいたずらっぽく笑う。

「あなたのことがなかったら、わざわざ動きません。他人なんて生きてても死んでてもどちらでもいいですからね」

はい。出ました人でなし発言。しかも超いい笑顔。
リコリスも笑い返す。

「よかった、私の知ってるライカだ」

さらば罪悪感。

思い返せばゲーム初期、こんな毒まみれの発言ばかり投げつけられて、何度心折れそうになったことか。懐かしい。

「あなたのそういう素直なところ、好きですよ」

「私はライカの素直じゃないところも好きだな」

「……」

「ふ、照れるな」

リコリスが笑顔全開で言ってやれば、ライカリスが口元を押さえて顔を背ける。その耳が赤いのを確認しつつ、彼女は追い討ちをかけた。

甘いぜ。こういうのは照れたほうが負けなんだ。
感じなくてもいい罪悪感に苦しめられた仕返しやつあたりをしておいて、目

の前の赤い頬を撫でる。「ずるい」とかなんとか聞こえてきたが、スルーで。

「で？　こんなにやつれちゃってるのは、食糧難のせい？　皆に食べ物分けてたとか」

でもライカリスは自分で狩りができるし、モンスターだって構わず食べてしまうから、こんなに痩せるのはおかしくないだろうか。

「ああ、いえ、それは――まあ、そんなところです」

言い淀んで、結局言葉を濁した。

リコリスもそれ以上の追求はしなかった。彼の瞳をまた、あの苦しくなるような光がよぎったから。それに。

（――ごめんね。私にはそんな資格、ない）

全部話せと、言える立場にない。言っていないこと、言えないことが多すぎる。

リコリスは大きく息を吐く。それから、不安そうに彼女を伺っているライカリスの肩を軽く叩いた。

「じゃあ、これからはちゃんと食べてよね。私が帰ってきたからには、スイエルの町の食糧難も解決だし？」

「え、あ、はい」

返事をしたライカリスに微笑んで、立ち上がって、大きく伸びをした。

「さあて。これから働くぞー！」

「……無理はしないでくださいね」
「倒れたら看病よろしく？」

ぼつりと言われた言葉には、遠まわしな返事で。と思ったら、視線がきつくなった。

「——リコ」

あ、怖い。

「ライカにだけは怒られたくないなあ、そんなに痩せて」
「リコ！」

怖いけど、過保護だね。

勢い込んで立ち上がったライカリスの切れ長な瞳が見下ろしてくる。

内心ちよつとヒヤヒヤしながら、その視線を挑発的に見つめ返した。

「じゃあ、ちゃんと生活するって約束しなさい」

「リ——」

「しっかり食べて、危ないことはしないで、もっと自分を労わりなさい。心配させないで」

「あの」

「隠せて言ってるんじゃないからね？　ちよつとなら大丈夫とかでもないからね？」

リコリスの知らない2年間だけではない。ゲームであつた出来事も視野に入れて、問答無用で畳み掛ける。

そうだ。これはもう、ずっとずっと言っやりたかった。この男

は自分に無頓着すぎる。

クエストでは要望に従って動くだけだったし、そもそも会話ができるわけでもなかったし。画面の中のキャラクターに怒っても仕方ないと思っていたが、しょっちゅう目の前で怪我をされるものだから、本当は悔しく悔しくて。

こうして目の前に生きている以上言っておかなければ。あんな調子で無茶をされたら、身がもたない。絶対胃がねじ切れる。

いいチャンスだから、言えるだけ言っておこう。

「たいした怪我じゃないとか、ちよつとくらい怪我しても平気だとか……私の方が平気じゃないの」

「わ、分かりましたから」

「ホントに分かった？ また繰り返すなら、私だって色々やっちゃうよ？ ひっくり返るまで働いたり、敵の大群に単騎特攻とかしてやるんだから」

「やめてくださいっ！」

堪りかねて叫ぶように言ったライカリスの目を真っ直ぐに見る。

「だったら。もっと自分を大事にするって約束しなさい」

「約束、します。しますから」

「ん、よし。なら私も無茶はしない」

満足したりコリスが頷くと、大きなため息が返ってきた。

「……本当にやめてくださいね。妖精師で特攻なんて自殺行為以外の何ものでもない」

（そりゃそうだ）

なんといつても、リコリスはメインの職業に妖精師、副業に神官^{プリースト}を選んでいる。

双方共に防御が非常に低く、その2つが合わさると文句なしに紙である。ぺらっぺらだ。レベルが上がってもそれは変わらない。

そしてその上、単体火力も最低だ。攻撃魔法なんて1つだけという悲しさ。

狩りをする時など、MPの多さと回復魔法に物を言わせての持久戦だ。しかも雑魚相手に。

（1人^{ソロ}なら、ね）

「しないしない。ライカが約束守ってくれるならね。私の戦い方知ってるでしょ？」

「知ってますけど」

そう。極めてしまえば、妖精師には妖精師の戦い方ができる。

その光景を思い出したのか、ライカリスが微妙な顔をした。本気のリコリスの戦い方は実に独特なのだ。

「——とにかく、約束しましたから。あなたも無理はしないで」

「うん、分かってる」

やっと少し安心できたのか、ライカリスは表情を緩めた。

「さ、戻ってご飯にしよう」

町の方も気になるけど、そこまで深刻な状況でないなら、ライカリスに食べさせるのが先だ。

その後は畑でありったけの作物を収穫して町に向かおうか。

（いや、でも。ライカこの顔色だし……休ませたいなあ）

町に行くといったら絶対ついてきそうだ。優先すべきは――、

「リコさん」

「うん？」

色々考えていたら、後ろから静かな呼びかけがあって、腕を掴まれていた。リコリスは足を止めて振り返える。

「もう、どこにも行かないくださいね。私の隣に……いて、ください」

約束を求める声だった。

咄嗟に答えることができず、リコリスは沈黙する。

答えるの？ 答えていいの？ 答えられるの？

確かに、強く願うほど戻りたいと思っているわけではない。戻りたい理由がない。

困ったことに、目の前の相棒の近くになら、いてもいいかもしれないと、思い始めてもいる。

でも。それでも。

何が原因で、どういった理由でここに来てしまったのか、分からない。

それは、いつまた、この世界から消えるか分からないということだ。

——ライカリスを置いて。

（この人を置いて？）

腕を掴む大きな手が震えていることに気づいて、リコリスは唇を噛んだ。

「ライカ。私は牧場主たちが消えた理由が分からない」

「そんなの、私にだって……」

「そうだよ。だから、またいつ同じことが起きるか分からない、と思う」

「——っ」

ライカの顔が歪む。歯を噛みしめて、きつく眉を寄せる。決壊は目前で。

掴まれた腕が痛い。感情が高ぶると、本当に手加減できないようだ。

「ずっとここにいて、はっきりと断言はできない」

「……そんなの、嫌です」

「分かってる。だから……だからね、私の意志だけでいいなら。約束、するよ」

まさかの異世界初日で、永住の決断を迫られるとは思っていなかったけど。

我ながらなんて単純で流されやすい、とも思っけれども。

正直、相手が悪かった。勝てない。

「もし選択の余地があるなら、迷わずライカを選ぶから。許されるなら、ずっとライカのところにいるから。それだけは、約束」

「——はい」

伏せた瞳から、一滴、ほろりと落ちた。

そんなライカリスの長い前髪をかき上げて、リコリスは顔を覗き込む。

「……やーい、泣き虫」

「なっ」

「ところでそろそろ腕放して。折れる」

長袖だから見えないけど、痣くらいできていそうだ。

途端に慌て出すライカリスを眺めながら、リコリスは決めた。

こうなったら意地でもここに残る方法を、あるいは確証を探します。

探して、必ず掴んでやろう。

第4話 巨大蝙蝠とトマトパスタ

「何を作ろうかな」

小さなキッチンを前に、リコリスは腕まくりをした。
ちなみに袖を捲くつた左腕には手の跡がくつきり。犯人は後ろで
無意味にうろうろしている。

確か調理台の下に棚に、器具一式が入っているはずだ。

家と家具はケチったリコリスだが、調理器具はレア品を大量に揃えていた。

『アクティブファーム』には「鍛冶」「革細工」「裁縫」「木工」「錬金」「料理」の6つの生産スキルがあり、この中から2つを選んで伸ばすことができる。

リコリスが選んだのは錬金と料理。故に調理器具にもレシピにも不自由しない。廃人らしく、集められるだけ集めてある。

リコリスはしゃがんで木製の戸に手をかけた。
何も考えずに両開きのそれを開いて、

「……………」

——パタン。

閉じた。

棚の中にあつたのは——否、棚の中は異空間だった。

棚の中は夜だった。見たこともない大きな満月が浮かんでいる。

その満月を背景にして、おどろおどろしい城が建ち、その周囲を無数の蝙蝠が飛んでいて、リコリスはその光景を見下ろしたのだ。棚はそんな謎の巨大異空間の上空に口を開けており、目当ての調理器具は、その前方を漂っていた。

何事だ。

「リコさん？ 何かありましたか？」

「な、なんでもない。何を作ろうかと思っただけ」

不思議そうに訊いてきたライカリスに、力なく首を振った。

自分の家の棚に驚いているなんて、突っ込まれたら言い訳できない。リコリスはずっとこの家に住んでいたことになっているのだから。

それに実は、心当たりがある。

ゲーム中では、棚を開くとマスが並んでおり、アイテムアイコンを自分の持ち物から移動させて収めるシステムになっていた。おそらく、大抵のゲームでそうになっているだろう。

ただ、このゲームではその棚画面の背景画像を設定できるようになっていた。

リコリスがこのキッチン棚の背景に設定していたのが、ハロウィンイベントで配布された画像だった。大きな満月に、歪な城のシルエット、飛び交う蝙蝠……。

（そのせいかーっ）

謎は解けた。だがあえて言いたい。

何故こうなったし。

「何を作るんです？」

「ん。トマトのパスタとかどうかなあ」

レシピを所有しているはずだ。

冷蔵庫の中に入れていたアイテムを思い出しながら、リコリスは答える。食材は全てその中だ。

そちらにも色々入っていたはずだが……棚がこの様子だと、冷蔵庫の中も力オスな気がしてならない。

覚悟を決めて、もう一度棚を空ける。目の前に浮いている器具の中からお目当てを探しつつ、内心で少し焦る。この棚、使い方が分からない。

「ええと、麺を茹でるから【寸胴】でしょ」

言葉にすると、アイテム名に反応したのか、すすす、と中のひとつが近寄ってきた。

寸胴だ。

こうやって使うのか。便利といえば便利。

寸胴を引っ張り出しながら、リコリスは少し感動した。

「あと、【フライパン】、【片手鍋】、【包丁】、【スパゲティレードル】……【お玉】と【木ベラ】もかな」

こんなものだろうか。

近づいてきた物をひいひいと手にとって考えていると、ライカリスが隣から覗き込んできた。

「相変わらず前衛的な収納ですね」

「……でしょ？」

家主もドン引きするくらいにね。

でも、そうか。ライカリスはこの棚のことを知っているのか。そういえば、ゲーム中、何度も彼を連れて家に来ていたし、料理をしたこともある。知っていてもおかしくはない。誤魔化していて本当に良かった。

「これ、下はどうなっているんですか？」
「さあ？」

こつちが訊きたい、そんなこと。
興味深げに身を乗り出すライカリスにハラハラする。どうなってる分らないだけに心配だ。落ちたらどうしよう。

彼の服の裾を握りながら、そこでふと、他の可能性に思い至った。
(あ、もしかしたら奥行きがあるっぽく描かれただけの絵だったりして)

蝙蝠が動いていたのも、動画だと思えば。
安心しかけた時、ライカリスが僅かに身じろいだ。
え、まさか落ちる？　ぎよっとして裾を握る手に力を込めると、
彼は何事もなく上半身を戻して、次いで引き抜かれたその手には、
黒い塊が。

「捕まえちゃいました」

やたらと大きな蝙蝠と、10センチの距離で目が合う。
大人しくしている蝙蝠は、よく見ると怯えているようだった。さすが野生動物。自分を捕らえた男が危険なことを、本能で察しているようだ。

小さいながらもつぶらな瞳が、助けを求めるようにリコリスを見ている。

「逃がしてあげなさい」

「はい」

当人もただ何となく捕まえてしまったのだろう。再び柵に腕を突っ込んで蝙蝠を緩く放り投げた。城の方へ飛んでいくのを、リコリスは見届けた。やっぱり本物なのか、この中。

「……」

まあ、いい。悩んでも仕方がない。今すべきは料理だ。

リコリスのスルースキルはわりと高い。

リコリスは調理台の前に立った。彼女の前には食材が並び、調理されるのを待っている。

冷蔵庫の中は、例によって異空間だったが、今は触れないでおこうか。

（ところでコレ、どうするの？）

このまま始めてしまってもいいのか。

調理台に向く視線に少し力を入れると、べろんと画面が表示された。レシピ一覧だった。リコリスが今まで集めた大量のレシピが載っている。

この中から目的のトマトパスタを探し出し、選択するとレシピ一覧が消えて、レシピが出てくる。

（……ん？）

表示させてからリコリスは気づいた。

そこにはやたらと詳しい手順が書いてあり、代わりに【開始】ボタンは存在しなかった。レシピは調理の邪魔にならない位置に浮いていて、とても見やすい。
ということとは。

（え、ガチで作れってこと？）

普通に料理しろと。道具と材料揃えて、開始ボタンをポチッとントントンピコーンはどこ行った。

「何か手伝うことありますか？」

固まっていると、ライカリスが覗き込んでくる。
はっとした。このままではいくらなんでも不審すぎる。

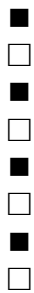
「あ、じゃあ食器お願い……」

取り忘れた皿とフォークを頼む。「はい」と返事をして棚の前にしゃがみこむライカリスを見下ろしながら、リコリスはため息をついた。

（いや、料理はできるよ。できるんだけどさあ）

料理はまだいい。しかし他の生産スキルはどうなる。裁縫とか、切ったり縫ったりして装備作るのか。

予想外の展開に戸惑いつつ、ベーコンに包丁を入れた。



今日ほど料理ができてよかったと思う日はない。

強いて言えば、彼氏を家に招待して初の手料理を振舞う状況に似ている。……ちょっと違うか親友だし。

リコリスは元々一人暮らしだったため、手際は悪くない。作ったことのないメニューだからレシピを見ながらになったものの、作業そのものはスムーズだった。

「美味しいですね、これ」

地味な木製テーブルに向かい合って座り、嬉しそうにパスタをついているライカリスを眺めて、リコリスは今心底ほっとしている。内緒だ。

「そう？　じゃあ、また忘れた頃に作ってあげる」

「忘れた頃なんですか」

「同じのばかりだと飽きない？　他にも色々作れるし」

そう言うと、ライカリスは嬉しそうに微笑んだ。

「色々作ってくれるんですね。……嬉しいな。楽しみです」

「う」

リコリスにとっては何気ない言葉だったが、ライカリスにとっては『これから』を約束するものだったらしい。

想いが真っ直ぐすぎて、照れる。

「っ、作るよ、たくさんね。ぼよんぼよんに肥えさせてやるんだか

ら」

「いえ、それはちょっと」

ライカリスが苦笑した。

照れ隠しだと、バレているだろうか。いや、肥えさせるのは本気なのだけだね。

「ガリガリよりぽっちゃりの方が好きだなあ」

「えー……」

何やら本気で悩んでいる様子なのがおかしい。

こっそりと笑いながら、リコリスはぐいっとコップの中身を呷った。中身はついさっき搾った牛乳だ。

ライカリスも食べ終わって、手を合わせている。

「ごちそうさまでした。あ。洗い物は私が」

「いや、ライカは休んで。そんな顔色で働かせるほど鬼じゃないよ私」

しっかり食べて少しだけ顔色は良くなっているが、まだまだ。

食器を片付けようとするライカリスを、リコリスが止める。

「でも」

「後で畑の野菜収穫して町に行くから、その時に手伝ってよ。今は休憩。ね？」

手伝わせるといっても、そんなに働かせるつもりはないのだが、それは言わないでおく。

「……分かりました」

渋々頷かれる。

それでも食器は運んでくれるらしく、リコリスの分の皿も重ねられて流しに移った。

洗剤は流しとセットなのだろうか。思い返してみると、そんな装飾がついていた気もする。

皿をスポンジで擦りながら、リコリスは後ろに声をかけた。

「お昼寝しててもいいよ？」

「私が寝たらリコさん、どこかに行ったりしませんか」

「しないしない。誰かさんがまた泣いちゃったら困るし」

返事はない。言い返せなかったようだ。

洗い終わった食器を立てかけて、濡れた手をタオルで拭いながら振り向くと、いつの間にかベッドに移動していたライカリスが、リコリスを見ていた。

目が合うと、ぽんぽんと隣を叩かれる。

リコリスは肩を竦めて、その要望に従った。

「甘ったれ」

また返事はなく。

リコリスの肩に、そつと頭が乗せられる。さらさらと髪が流れた。何も言わないので、そのままにしておこう。

（この後の収穫は——妖精さんたち呼べるかな）

妖精師のリコリスは何種類かの妖精を呼んで使役できる。

その中に家妖精という種類がいて、戦闘には参加できないが、牧

場の仕事を指示しておけばやってくれる。牧場を見た限りではいなかった。未召喚状態で引っ込んでいるのだろうと思う。思いたい。妖精師なのに妖精が呼べないと、まさしく役立たずだ。

（収穫したら町に行って、話を聞いて）

住人たちを思い浮かべる。

ライカリスのように、プレイヤーのパートナーだったNPCもいたはずだ。彼らはリコリスを見てどんな反応をするだろう。

（あと、扉を直さないといけないし、お風呂もなんとかしないと）

よく考えたら、最低限すらそろっていない、この家。修理と増築諸々でいくらくらいかかるだろう。

確認しなくても知っている己の所持金。桁が少なすぎて覚えている。諸事情で貧乏街道まっしぐらのリコリスには頭の痛い状態だ。覚悟の上の貧乏だったが、現状は予想外で溢れている。

作物を町の人々に売りつける気はないし、プレイヤー市場がないだけに稼ぐ場が限られてくる。オークションや露天システムで、いくらでも物を売り買いできたゲームとは違うのだから。

冒険者ギルドに依頼を受けに行くにも、スィエルの町に支部はないし、転移装置も動かないようだから難しい。

まさかこのレベルで必死の金策をする羽目になるとは……。

扉を直すくらいなら自分でもできるだろうが、お風呂は無理だ。近所に天然温泉があるから、毎日そこまで通うしかないか。

悩むことしばし。不意に肩にかかる重みが増した。静かな呼吸音が聞こえてきて、ああ、とリコリスは納得する。

少し身体をずらすと、凭れかかってきていた上半身が彼女の前に落ちてくる。それを、頭が膝の上に来るようにそっと調整して、髪

を束ねる紐を解いた。

目は覚まさなかった。あまり熟睡できないのだと以前聞いたことがあるが、相当疲れていたのだろうか。

真っ直ぐで柔らかい髪を梳いてみる。

起きた時には、もう少し元気になってくれていたら嬉しい。

「おやすみ、ライカ」

第4話 巨大蝙蝠とトマトパスタ（後書き）

トマトパスタは、フレッシュトマトのアマトリチャーナイメージです。

第5話 家妖精とやっぱり蝙蝠

ライカリスの昼寝の時間は、リコリスにとってなかなか有意義な時間となった。

【メインメニュー】

【ステータス】

【スキル】

【フレンド】

リコリスの意思に忖えて、次々と画面が目の前に現れる。
わざわざ声に出さなくてもメニューが出せるように練習していたのだ。

トマトパスタを作った時、空中に浮いたレシピは、ライカリスには見えていないようだった。

レシピと同じように各メニューも他人に見えないのなら、いちいち口に出して表示させていたら独り言の多い人になってしまう。それでなくても、念じるだけで扱えたほうが、便利に決まっている。
ライカリスが寝ているのでうるさくはできないし、ちょうど良かった。

「ふう……」

最後に「クローズ」と念じて全ての窓を閉じて、彼女は一旦目を閉じた。

意識を集中すると視界の端に簡易情報が見えるようになったのも大きい。リコリスの名と、HP、MPと日付と時間が表示されてる。気を逸らすと見えなくなるので邪魔にもならないし、便利だった。

『 夏の月2番目 3日 午後1時 』

現在はこう。そういえばトマトは夏の作物だった。ここに現れた当初、日差しはまだ柔らかかったが、今はきつい。夏だと知って納得する。

この家には時計がないから分からないが、時間も間違っではないないだろう。

最初にメニューを出したときには12時を少し過ぎたくらいだった。このお昼寝もそろそろ1時間強。

本当によく寝ている。

自分の簡易情報を出す時のように見つめると、ライカリスの情報が出てきた。名前とレベルと、HP、MP、そして状態『睡眠』とある。

つつき甲斐のない頬をつつくと、ライカリスは低く唸って眉間に皺を寄せた。

「ライカ。そろそろ起きないと夜寝られなくなるよ」

「んー」

イヤイヤと首を振る。膝の上でやられると、とてもくすぐったい。

「ラーイーカ」

むーむー唸るライカリスに何度か呼びかけていると、5分ほどし

て漸く瞼が持ち上がった。
予想外に寝起きが悪い。

「……リコ」

「おー、おはよ、ライカ」

「ん。……夢？」

ぼんやりした目で問われる。何を訊きたいのか分かって、リコリスは首を振った。

「夢じゃないし、ここにいるよ」

「ん、んん」

それから、しばしばと瞬きが繰り返されることしばし。虚ろだった視線がはつきりして、リコリスを見上げた。

「おはよう。寝坊助」

「……そんなに寝てましたか」

「ううん。1時間くらいかな」

ライカリスが目を擦りながら体を起こした。それを待つて、リコリスはコップに水を汲みに行く。

未だ睡魔と闘っているのか、額に手を当て、不機嫌に顔を顰めている様子は、昔のライカリスを思い出させる。掠れた声も低く無愛想だった。

「はい、水」

「はあ、どうも」

そっけない礼を述べて、ライカリスが水を受け取る。その様子を

じつと眺めると、訝しげに横目で見返された。

「何か？」

「何か？」と「どうも」……本当に初期の彼のような。訪れるととても嫌そうに、最低限だけ口を開いていた。挨拶もなく、返ってくるのは迷惑そうな、蔑むような視線のみという。

ゲームだったから耐えられたし、ムキにもなって必死で通ったが、今現実になんかをされると。

（下手したら泣くな、私）

それくらい、態度が悪かったのだ。再会してからはかなり遠のいているが。

リコリスは警戒されないよう、ゆっくりと動いて、目の前の横顔に触れた。

「顔色。少し良くなったかなって」

「ああ……」

触れる手にはなされるがまま。髪を梳いてやれば、気持ちよさそうに目を閉じる。

「すみません。まだ少し頭がはつきりしなくて」

「そか。もう少し寝かせてあげればよかったね。ごめん」

「いえ、大丈夫です」

なんだったら、町に行っている間に寝ていてもいいのだ。それを言うともう猛反発されて更に情緒不安定になりそうだったので、黙っておく。

リコリスとしても、町へはついてきてくれた方が嬉しいし、どうせ一緒に行くことになるなら、機嫌良くいてもらいたい。

なんとなくライカリスの扱いが分かってきたというか、当面落ち着くまでは余計なことを言わず、好きにさせた方がいいという結論に達したのだ。

「大丈夫なら……これから畑のものの収穫しようと思うんだけど」

「あ、手伝います」

「ありがと。髪、やったげる」

「あれ」

髪が解けているのにと今更気づいたのか、一房摘まんでいるライカリスの後ろに回って、リコリスは枕元に置いていた髪紐を手にとった。

「ねえ、ライカ？」

「はい？」

大人しくしている頭を見ながら、ふと湧き上がる悪戯心。

「なんならツインテールとか、おさげとか」

「やめてください」

「ちっ」

「えええ、舌打ちって……」

この髪が綺麗すぎるのが悪い。けしからんキューティクルだ。デフォルト通りに縛ってはみたが、実はツインテールの野望を捨てていないリコリスだった。

「よし。じゃあ、やりますか」

「はい」

完全に目が覚めたらしいライカリスを後ろに従え、外に出る。
家のすぐ前から見渡す限りの畑があつて、人力で収穫しようと思
つたら、どれほどの時間と労力が必要だろうか。

妖精師でよかったと、心底思った。他の職にはない恩恵だ。
一呼吸置いて、視線を上げる。

【スキル選択】

【家妖精ランダム召喚】

【スキル発動】

キュイイイ、と高い音がした。

リコリスが期待を込めて見つめる先、ぽんつと可愛い音がし
て煙のようなエフェクトが現れる。

その中には。

「わぁーい。ご主人さまぁ」

（なんだこれ、可愛いーっ）

黄色の三角帽子に、ゴーグルを引っ付けた小人が立って、リコリ
スを見上げていた。

明るい茶色の髪はカールして、同じ色の瞳はくりくりだ。身長は、
リコリスの膝くらいまでしかない。

ゲームにはない、凄まじい破壊力だ。

特徴からいって、『テテ』と名づけた妖精だろうか。妖精たちには自分で名前をつけられ、家妖精は見た目の変更も可能だった。小人の前にライカリスが膝をつき、小さな手と握手を交わしている。

「久しぶりですね、テテ」

「はいっ！……？　ライカさま、お久しぶりなのです？」

挨拶に元気良く答え、それからテテが首を傾げた。かと思ったら、目を丸くして急に慌て出す。

「あわわわわ。ライカさま、大変です！　お顔が青いのです！　具合悪いですかっ？」

どうやら家妖精の時間も、2年前から動いていないらしい。それにしても、独特なテンポの妖精だ。いや、可愛いけど。

「大丈夫よ、テテ。これからいっぱい食べさせて、いっぱい寝かせて、元気にするからね」

「わあ。ぽよんぽよんにするですね？」

ライカリスの顔が引き攣った。

「……………この主人にしてこの妖精あり……………」

ぽそりと言われた言葉は聞こえないフリで。

さて、と気を取り直す。妖精も無事召喚できることが分かったし、収穫だ。

【スキル選択】

【家妖精全召喚】

【スキル発動】

最初のスキルとは違い、こちらは全ての家妖精を呼び出せる。

職レベルをカンストさせ、全ての職業クエストを完了した、マスタークラスの妖精師であるリコリスが召喚できるのは、20人。

全員に名前をつけるのが大変だったが、苦労に見合うだけの恩恵はある。単調な牧場の仕事は全て妖精に頼んで、自分は狩りに行けたからだ。監督は要所要所でよかった。

（――現実になると、どうだか分からないけど）

リコリスの周囲に次々とカラフルな妖精たちが現れる。

名前は『キキ』『ココ』『トト』『ナナ』『ネネ』『ノノ』『ミミ』『モモ』『ララ』『リリ』『ルル』『ピピ』『ペペ』『ポポ』『シュシュ』『ティティ』『ヴィヴィ』『チュチュ』『フィフィ』、そして最初に呼ばれた『テテ』だ。

名前につっこんではいけない。ネーミングセンスがないとも言わないで頂きたい。リコリスは名前をつけるのが苦手なのだ。

それにしても、きゃあきゃあ騒ぐ妖精たちは非常に可愛い。

「じゃあ皆、収穫のお手伝いよろしく！」

『はい！』

ざあっとカラフルなちびっ子たちが散っていく。

ところで収穫した作物はどうやって運ぼう。普通ならアイテムは

プレイヤーの四次元鞆に入れて所持するのだが。ゲーム中だと所持品画面は、マスとアイテムアイコンで表示されていた。
どこぞの棚と同じである。

「……」

リコリスは、自分の腰に不安な視線を落とした。彼女の腰には小さなウエストポーチが巻かれている。

プレイヤーの鞆は好みで見た目変更と機能拡張ができた。リコリスのウエストポーチはハロウィンのときに限定販売されたデザインで、蝙蝠の形をしている。基本的に服や持ち物は、全てハロウィン調で揃えていた。

両端に小さな羽がパタパタしているのは可愛いのだが、口にギザギザの歯がついているのが、今となっては少し怖い。だって噛みつかれそうだし。

可能なだけ拡張していたので、容量は最大だ。

軽く触れてみると、がばっと蝙蝠が口を大きく開けた。びくつとした。

そつと覗いてみた中は……。

「……………」

どうやらゲームでの収納各種は、この世界では全て異次元になっているらしい。ハロウィングッズなだけあって、背景画像もそんな感じだったこのポーチ。

（蝙蝠の口を覗くとそこは魔界でした……って、腰に魔界の入り口とか怖いわっ）

使い方は棚の時に分かっているので、何とかなる、だろう。多分。

リコリスとライカリス、20人の妖精たち。総勢22人での作業は早かった。というか妖精たちの作業効率が凄い。

家妖精には牧場仕事専用スキルとレベルがあつたので、そのせいだろうか。

頭の上に器用に野菜を重ねて、せつせと走り回っている光景は、可愛いと思うべきか。しかし、動きが高速すぎてどちらかというとシニールなような。

どんどん集められる野菜を、リコリスはせつせと自分のウエストポーチに放り込んでいく。

野菜でいっぱいだった広大な畑が、さくさくと禿げていく。時間をおいて何度も収穫可能な苗以外は、残らず刈り取られていった。

「やることはありませんね。手を出したら邪魔になりそうです」

リコリスの隣で、ライカリスが呟いた。

彼も最初は参加していたのだが、妖精たちの勢いに負けたのか、戻ってきていた。

図らずも、あまり無理をさせなくなつたリコリスの予定通りだ。

「だねえ。さすがというか、なんとというか。すごい子たち」

「ええ。さすが、あなたの家妖精です」

あなたの、が強調されている。

ちら、と見上げると、優しく見つめ返された。そういうことか。

「どおりで。やたらと愛想がいいと思つた」

この人間嫌いが。

「彼らは人間ではないですし……妖精師の妖精は、その人の一部でしょう?」

「それはそうだけど」

「あなたの妖精はとても可愛くて、愛しいと思います」

「……………ああ、そう」

反応に困ったリコリスを、誰も責められないだろう。
深い意味はない。ない。ないったら、ない。

「ご主人さま、お顔が赤いのです! 大丈夫なのですか?」

「わあ?!」

突然声をかけられて、リコリスは飛び上がる。

いつの間にか妖精たちが戻ってきていた。最後に回収された野菜と一緒に。

「お顔赤い!」

「ご主人さま、ご病気?」

「きやあつ 大変なのです」

「大変!」

「大変!」

20人が皆でパニックを起こすものだから、收拾がつかない。
拳句、ライカリスにまで顔を覗き込まれる。

「大丈夫なんですか?」

「大丈夫! なんでもないからっ」

なんの羞恥プレイだ。

咄嗟に否定するが、彼は納得しなかったようだ。風邪でも、と額に触れられそうになって、リコリスは慌ててその手を避ける。

「……」

「ホ、ホントに平気。具合悪くなったら、ちゃんとつよ。約束したもん」

「……分かりました」

洪々と手が戻された。

「ほら、おチビたちも。私は大丈夫だから落ち着いて」

「大丈夫だって」

「大丈夫？　ほんと？」

「ご主人さま元気！」

「よかった！」

「よかったね！」

元から落ち着きがないので、パニックが収まってもあまり変わらなかった。単純で可愛いけど騒々しい。

リコリスは深呼吸して、転がっているトマトをひとつ拾い上げてポーチに放り込んだ。それを見た妖精たちも各々野菜を拾い、彼女に手渡そうとしてくる。

受け取るうとして、リコリスは先を越された。

何に？　——ポーチに、だ。

ぐわば！　と一際大きく口を開けた蝙蝠に、ぎよっとして硬直する。

直後、全ての野菜が吸い込まれていつて、あっという間に最後の

トウモロコシが消える。口を閉じた蝙蝠がげふつと鳴いた。

（気にしたら負け。気にしたら負け。気にしたら負け。気にしたら負け……！）

モノは考えようだ。蝙蝠も手伝ってくれたのだと思えばいい。妖精たちはコウモリコウモリと楽しそうだ。

「リコさんの持ち物は、本当に独特ですね」
「……ははは」

ホントにな。
しみじみと感心されて、リコリスは乾いた笑いを零すのだった。

第6話 いざスイエルの町へ

森の小道を、ライカリスと並んで歩く。

リコリスの牧場は森に囲まれていて、少し歩けばスイエルの町だ。

各村や、町にはそれぞれ近所に、広さや土地の値段は様々だが1箇所空き地がある。大きな都市だと複数ある場合もあった。

本来は別エリアに作成されるプレイヤーの牧場だが、条件を揃えればその土地に自分の牧場を、育てた状態のまま引越させられるのだ。

陸続きになることでNPCが遊びに来るイベントが頻繁に発生する他、専用クエストや専用アイテムも用意されていた。また、その町の住人として認められることになり、買い物で割引になるなど、恩恵は大きい。

しかしその条件というのが非常に玄人向けで、どのくらいかと問われれば、リコリスの財布がすっからかんになるくらい、である。

他にも、パートナーが必須で、近くに住んでいないといけないとか、近所に暮らす人々全員と友達にならなければいけないとか、ボスを1000回倒して出るか出ないかというアイテムをとってくる、等々とにかく大変だったのだ。

そうして禿げそうなほど苦労して手に入れたリコリスの土地は、スイエルの町の真南。歩いて1、2分で町の外れに辿り着く。

妖精たちには所持していた種を渡し、作業の続きと留守を任せてきた。

これで牧場の心配をすることもなく、心置きなく住人たちとの対面に緊張できるはずのリコリスだったのに、それよりも今は隣を歩く男が気にかかる。

町に近づくにつれて口数が減り、無表情になっていくのが怖い

だ。

元々ライカリスは、誰にも会わずにいられるように、モンスターが弱く、食料も豊富な地域に引き籠もっていた厭世家だ。それをリコリスが時間と手間をかけ気合で引っ張り出したわけだが、大の人間嫌いまで治ったわけではないので町に行くのが嫌なのだろう。

（重い。沈黙が重い……！）

ただでさえ緊張してきているのに、唯一の味方が敵になったように辛い。

「リコさん？」

いつの間にか足が止まっていた。不審そうなライカリスの声ではつとずる。

「あー。えっと、ライカ？」

「はい？」

ん、と目の前の男に手を差し出す。無表情な視線がそれを見下ろして瞬く。

「繋げと？」

「……ダメ？」

後を引きそうな心労よりも、一時の恥とそれに勝る安心を選んだリコリスだった。

「どちらが甘ったれなんでしょうね？」

「うぬ」

昼寝の前にライカリスに言った言葉を返されて、リコリスが詰まる。

しかし、意地悪な微笑に負けて引つ込めようとした手は、するりと指を絡めとられて彼の近くに留まった。

そのまま手を引かれる。

「すみません、冗談です」

「……冗談？」

「ええ。冗談」

苦笑してから、ため息混じりに眉尻を下げる。

「これから多分もつと機嫌が悪くなると思うので……先に謝っておきますね。すみません」

「え、自分で言っちゃうんだソレ」

「言っちゃいます。リコさんに嫌な思いをさせたくはないんですが、こればかりは自分でもどうしようもなくて」

「難儀な奴……」

「すみません」

そんなに、そこまで嫌か。

重ねられた謝罪に、リコリスは首を振る。

「いや、なんていうかこっちこそ。牧場で待っててって、言っただけじゃなくてごめんね」

「それは言ってくれなくていいです。言われたら落ち込みます」

「ああ……ホントに難儀だわ……」

それでも、行かないわけにはいかない。

歩みを再開してすぐに町に入った。

一応目的地は決めてあるが、それまでに知り合いにも会うだろう。そう思いながら進んで、しばらくしてリコリスは首を傾げた。

「人いなさすぎじゃない？」

今通り過ぎた広場なんかには、この時間帯、町の子どもたちが遊んでいたはずだが。

「余所者が入り込んで治安が悪くなってますから。食料目当てでやってきたみたいですけど、そういう人間は態度と頭が悪いですから、無駄に波風立てるんですよ」

「へ、へえ」

「面倒なので殺してしまおうかとも思ったんですけどねえ。止められてしまいました」

「えーと」

「とりあえず町の人間に被害が出そうな時だけ手を出して、残りの馬鹿は馬鹿同士でぶつかってるみたいだったので、放っておきました」

「……ソウデスカ」

お前が一番物騒だ！

そう叫ばなかったリコリスは、代わりに多大な精神力を消費した。ライカリスが見張ってくれていたから町の人々が無事なのは理解できるのだが、でもやっぱり毒舌怖い。毒舌だけで済んでいなさそうなところが更に怖い。

そしてひとりの知り合いにも会わないまま、目的地に着いた。白い壁に赤い屋根の、可愛い印象の屋敷だ。塀はないが、他の家より

もう少し大きい。

小さな庭を通って、扉の前に辿り着いて。

（つて、これゲームなら普通に無断で入っちゃうけど、今やったらまずいよねえ？）

リコリスは彼女の常識に則って、まずノックをするべく手を上げる。

もちろんライカリスと繋いでいるのとは反対の手だったが、そこで突然繋いでいた手を振り解かれて、驚いて動きを止めた。

「待つて」

「え？——わあっ」

そのまま素早く腰を抱かれて、後ろに引き戻された。抵抗もできず、反動で頭がライカリスの胸に当たる。

何事かと、きょとんと目を瞬いたのと同時に。

「リコリス——！」

凄い勢いで扉が内側から開かれ、迫力の美人が飛び出してきた。勢い余って壁にぶつかった扉が、ミシミシと音を立てる。

え、何コレ、デジャヴ。

赤みがかった金髪その美人が、リコリスを抱きしめる人物と似ているからおさらだ。

「マ、マザー・グレース」

リコリスは顔を強張らせながら、目の前で息を切らせている大柄な美女を見上げた。

マザー・グレース、本名はグレース・リッカー。

プレイヤーの案内人として一番初めに会う人物で、ゲームの説明を始め、アイテムやクエストをくれて、とにかくとてもお世話になるNPCだった。

町長さんである旦那さんを支え、町民にも慕われる皆のマザー。

面倒見のいい、優しい人だ。

確か娘息子が合わせて5人いたはずだが、未だ鬨りの見えない美貌をもつ。

そして。

「もう少し、落ち着いて出てこれないんですか？ リコさんが怪我をしたらどうするんです」

忌々しげに言うライカリスの、実のお姉さんだ。

家の扉を吹き飛ばされたリコリスからすると、お前が言うなや！という台詞だが、ライカリスが後ろに引っ張ってくれなかったら顔面強打の憂き目に遭っていたのも事実。

さすが血縁。

「あ、ああ。すまないね、リコリス」

「い、いえ」

「ああ、そんなことより、リコリス。今までどこに！ あ、怪我をしてたかもしれないんだ、そんなことよりなんて言ったらいけないね。ごめんねえ！」

混乱しているようだ。

心配してくれているのは伝わってくるし、当たり前のように受け

入れてもらえたことがとても嬉しい。

だが、少々勢いがありすぎる。ぐいぐい詰め寄られて足が勝手に下がるうとするが、ライカリスに抱きすくめられていて下がれなかった。

「えと、すみません、マザー・グレース。説明しますから、ちょっと落ち着いて……」

お願いしかけて、今度は後ろから大きな声が上がった。

「あああ！？ リコちゃんだ！ リコちゃんがいる！！」

住人に見つかったらしい。

「何イ？！ どこだ！」

「リコ嬢ちゃんだと？！ 帰ってきたのか？ 無事なのか？」

「リコちゃん！ リコちゃん、大丈夫なの？！」

「母ちゃん！ ライカ兄ちゃんが、リコ姉ちゃん連れてきたよ！」

見覚えのある人々が次から次へと飛び出しては集まっていく。それまでの静けさが、收拾のつかない大騒ぎに取って代わられるまでに、いくらの時間もかからなかった。

しかもその騒ぎはどんどん、どんどん大きくなって、その中央にいるリコリスは激しくもみくちゃにされた。悲鳴すら喧騒に――否、リコリスの無事を喜ぶ声に飲み込まれていく。

「……」

その中でリコリスを抱きしめたままライカリスは沈黙を守っていた。

この騒ぎの中で腕に僅かの揺るぎもないのはさすがだったが、
その視線は鋭く、騒ぎの輪の外を見据えていた。
きつくきつく。——彼が余所者と呼んだ人々を。

第7話 宴と酒と招かれざるなんとか

「——というわけで、ついさっき帰ってきたところなんです」

大騒ぎの1時間後。スイエルの町唯一の酒場、兼宿屋に場面は移る。

大勢の知った顔に見つめられながら、リコリスはここに至るまでの経緯を語った。

話せない箇所はぼかしつつ、皆と同じように、2年前の異変に戸惑いを見せて。

「そう……詳しいことはリコちゃんにも分からないのねえ。でも無事帰ってきてくれてよかったわ」

「本当だなあつ 俺あもう、リコ嬢ちゃんに会えねえんじゃねえかと……グスッ」

そういつてほろほろと涙を流すのは、裁縫スキル伝道師フリージアと料理スキル伝道師アガベ。プレイヤーにそれぞれ生産スキルを伝授してくれるNPCだった2人は、要するに、リコリスにとっては裁縫と料理の師匠のような人たちだ。

2人が泣くのにつられてか、周囲から複数鼻をすする音が聞こえてくる。同時に、良かった良かったと喜びの声も。

リコリスの前に小柄な初老の男性が立った。柔和な微笑と白い口ひげが印象的で、リコリスを見る目は優しい。

その隣には、マザー・グレースが寄り添うようにしている。

スイエルの町の町長、サマン・リッカーだった。マザー・グレースと並ぶと凸凹コンビだが、とても仲のいい夫婦として有名だ。

若い頃大恋愛の末に結ばれたとかなんとか、クエストが印象的だった

たのをリコリスは覚えている。

サマンはリコリスの顔を真っ直ぐに見て、目を細めた。心なしか、その目が潤んでいるようで。

「おかえり、リコリス。大事な仲間が無事に戻ってきてくれて、こんなに嬉しいことはない」

「……ありがとうございます」

この町の人々は本当に温かい。

「あ、そうだ。サマン町長」

「ん？」

感動すぎて忘れるところだった。当初の目的を。

腰からポーチを外して、サマンに差し出す。

「畑にあった野菜、片っ端から集めてきたんで。皆で使ってください」

「しかし、それでは」

「町の人たちで、食べ物平等に分けてたんですよ。ライカから聞きました」

申し訳なさそうなサマンに、リコリスは続ける。

「管理はお任せしますから。どうぞ、これも町の財産に加えてください」

今のリコリスから、町の人たちの気持ちに返せる唯一のものだ。この優しい人たちが飢えるのも嫌だった。

周囲がざわつき、サマンがうつむ、と困惑気味に唸る。と、彼の

眼前にあつた蝙蝠ポーチの口が突然開いた。

「え？」

——ぶっ

口をすぼめて、何かを吹く。吐き出されたそれは、こーんとサマ
ンの額に当たって、マザー・グレースの手に落ちた。

きゅうりだった。

空気が凍り、サマンが額を押さえた。当然だが、痛かったようだ。

「す、すみませんっ」

どうなっているんだ、この蝙蝠。さっきから自分の意志で動いて
いないか。

慌てるリコリスをよそに、満足げに口を閉じたポーチはそのまま
沈黙した。見事な丸投げ姿勢である。

「——ぶっ」

きゅうりを掴んだマザー・グレースが吹き出した。すぐに堪えら
れなくなつたのか、大きな体を揺すり出す。

「はっはっはっは！ いいじゃないかね、サマン！ 鞆まで、好き
に使えるって言うてくれてるよ！」

（え、そうなの？ そういう意味なの、この蝙蝠っ？）

彼女があまりに笑うものだから、それがだんだん伝染していつて、
気がつけば皆が笑っていた。

「ええと、すみません。サマン町長……」

額にキュウリが強打した拳句に皆に笑われるなんて気の毒だ。しかも一番大笑いしてるのが奥さんとか。

笑い声の中、リコリスがもう一度謝罪すると、サマンは赤くなつた額をさすりながら、それでもおおらかな笑みを彼女に向けた。

「いいんだよ。主人思いの鞆じゃないか」

（主人思いの鞆とか、初めて聞きました）

この世界では一般的なのか？ でもライカリスは独特だといっていた。

なんとも言えない表情をしたリコリスに、サマンが頭を下げる。

「こんなに町の者たちが笑っているのを見たのは久しぶりだ。本当にありがとう、リコリス」

「いえ、そんな」

恐縮してしまった彼女に、サマンがひとつ頷いて、ぱんぱんと手を打ち鳴らした。

場を満たしていた笑いが引いて、全員の目が彼らの町長に向く。

「ありがたく受け取ることでしょう。大事に食べさせてもらうよ、リコリス」

「はい。また収穫したらもってきますから」

「断つても聞き入れそうにないね。でも、無理はしないでほしい」

真摯な言葉に、リコリスは頷く。

「さて、では今夜は、我々の仲間の帰還を祝して、皆で騒ぐんじゃないか」

それを聞いた人々の顔が輝いた。

「宴会だーっ！！」

誰かが叫び、わあつと歓声が上がった。

そして、宴の準備のために、1人、また1人と酒場から飛び出していく。

「私も何か手伝いを」

「準備ができたなら声をかけるから、主役は2階でゆっくりしておいで」

「でも……あ」

サマンはにこやかに去っていつてしまった。

その背を見送るリコリスの肩に、手が置かれる。

「ライカ」

話し合いの最中、リコリスの後ろに控えて、全く口を開かなかったライカリスが、彼女を酒場の2階、客室の方へと促した。

大人しく従って階段を上がる途中、ふと、ライカリスが振り返った。

「そうだ、リコさん」

「ん？」

「——お酒は絶対に飲まないように」

低く、重々しく言われて、リコリスが俯く。

蘇る苦い記憶と、プレイヤーたちの叫び。

（そつえばこのキャラ、お酒飲めないんだった……）

この『アクティブファーム』というゲーム、クエストの途中で突発的にミニゲームが用意されていた。それはいいのだが。問題なのが、事前に情報を仕入れたからといって、クリアできるとは限らない、というところ。

ある都市の酒場で発生するクエストでは、謎の飲兵衛と飲み比べになり、ミニゲームが発生した。無論、プレイヤー仲間の話や攻略情報から、ミニゲームの存在は知っていたリコリスだったが。

（だからって、クリアできるわけないってのよ。あんな弾幕ゲー）

肝臓の働きの一部として、無数に撃ち込まれるアルコールダメージを回避、大元のアルコールを撃破（分解？）していくという、意味不明な弾幕回避シューティングゲームだった。本当に意味不明だった。しかも残機は1。考えた奴出てこいである。

このゲームに失敗すれば飲み比べに負けたことになり、結果お酒に弱いキャラにされてしまうのだ。このクエストの時NPCを連れていけば、勝ったときは祝われ、負けたときは介抱してもらえるという特殊イベントも発生する。

元から弾幕ゲームが得意だったとか、特殊な一部を除き、『アクティブファーム』のほとんどのプレイヤーが酒に弱いという設定になった。パートナーに介抱してもらいたいという理由でさっさと負けたプレイヤーも多かったが。

リコリスは例によってライカリスを連れて歩いていたので、彼の忠告も理解できる。

ちなみに介抱イベントは目を覚ましたら朝だったというお約束の展開だった。要は酒で記憶が飛びました状態だ。プレイヤーの間でも様々な憶測という名の妄想が飛び交っていた。

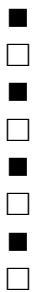
（何があつたのかな。何やらかしたのかな。私は。フフ……怖くて訊けない……）

願わくば、ただ倒れただけであってほしい。

「……了解」

忠告に素直に頷いて、彼女はため息をついた。

——宴会はジューズをお願いすることにしよう。



宴の始まりは、日暮れと同時だった。

酒場の庭にまで煌々と明かりが灯され、中も外も大騒ぎだ。見た感じ、リコリスの知る町の住人全員が集まっているようだった。

リコリスは既にボロボロだった。

髪をかき回され、背中を叩かれ、しがみつかれ抱きつかれ、泣かれて、時に怒られて。必死に固辞したので、酒を飲まずに済んだことだけが救いだろうか。

しかし、それでも何故か頭がふわふわするのは、酔っ払いたちの呼気のせいかもしれない。これは予想外だ。

ようやく開放されたのは、子どもたちがうとうとし始め、大人たちに酔いが回って、リコリスをさほど気になけなくなった頃。といったもど真ん中にいたのでは絡まれるので、彼女はこそそと隅に移動していた。

壁沿いに移動しながら、リコリスは自分のパートナーを探す。

（あ、いた）

宴の輪から外れた、酒場の隅の方にライカリスは立っていた。

壁に背を預け、無表情に目を閉じて、手には木のコップを持っている。

誰ひとり彼に声をかけないどころか、その周囲だけぽっかり空いているのである意味とても目立つ。彼の人間嫌いを知っている住人たちの優しさなのか？

リコリスは静かに近づいて、ぴたりと寄り添うように隣に立った。

……ここが一番落ち着く。

ライカリスはちら、と彼女に視線をよこすものの、口を開く気はないらしく、黙ってコップを傾けている。

「中身、何？」

「……飲ませませんよ」

酒か。

そういえば、相当酒に強いのだったか。そんなクエストだかイベントがあつた気がする。

「飲みたくないけどさ、もう空気だけでいっぱい。むしろもう酔ってる気がする」

「……」

酒場内は、今とても酒臭いことになっている。

リコリスが言えば、ライカリスは眉を寄せた。ちっと小さく舌打ちして、彼女の腕を掴む。

「出ますよ」

「へ？」

「外なら少しはマシでしょう」

「え、え？」

リコリスが目丸くする。

ちよつと酔ったかもしれない程度で、そんな対応されるとは思っていなかった。

介抱イベントの時、何があつたのか本気で恐ろしい。

（そんなに？　そこまで？！　ちょ、本気で何したの私っ）

内心パニックを起こすリコリスを引き摺るようにして、ライカリスは酒場の出入り口に向かう。

――が、そこに辿り着く前に彼は足を止めた。そして。

「――っ？！」

リコリスが思わず息を呑むほど、彼の纏う空気が尖った。

ぴり、と僅かな酔いなど、一瞬で醒めそうなほど、鋭い気配。これが殺気だといわれれば、納得できる。

どうした、と問う必要はなかった。

酒場の外がにわかに騒がしくなったからだ。今までの陽気な騒ぎとは違う、不穏なそれ。

酒場の大きめな出入り口を通って現れたのは、体格はいいが柄の悪い男たちだった。

見るからにまっとうな人種ではない。というか分かりやすすぎる。

「おう、楽しそうにやってんじゃねえか」

「ひっでえな」。俺たちには食う量減らせて言っておいて、自分たちだけ宴会ですかあ？」

3人。それぞれが品のない笑みを浮かべて、周囲を見回し……その視線がリコリスに止まった。

矛先が自分に向くことに、リコリスも異論はなかった。レベル的に考えて、どう考えても矢面に立つべきは彼女だろう。

だが彼らが動き出す前に、その前に立ちはだかった人がいた。

サマン町長だ。

小さな背中に、町民を守るのだという意志が見えた。

「今夜は我々の大切な仲間の無事を祝う夜だ。君たちは酒に酔っては暴力を振るおうとするからね。悪いが今夜は遠慮してもらいたい」

一回り以上体格の違う相手を見据えて、きっぱりと告げる。

立派だし格好いいし、庇ってもらえて嬉しく思うが、リコリスとしてはヒヤヒヤだ。

案の定、男たちはサマンに怒りを向けた。胸倉を掴み上げられて、彼の足が浮きかける野を見て、マザー・グレースが眉を吊り上げる。

「ちょっとあんたたち——！」

リコリスも動いた。スイエルの町の住人の、誰ひとり、怪我をさせるつもりはない。

「町長、交代してください」

「リコリス……」

進み出た彼女に、サマンが呻く。心配そうなその瞳に、大丈夫、と頷きをひとつ。

突き飛ばされるように開放されたサマンを支えて、下がらせた。

正直な話、この男たちに限っては、本当に全く心配は要らない。

リコリスが確認したかぎり、男たちのレベルは高くても20そこら。レベル1000のリコリスには、真剣で斬りかかっても傷ひとつつけられない、はずだ。多分。

むしろ心配なのは、近くにいるだけで卒倒しそうな殺気を放っている、リコリスの隣の人の方だ。

「嬢ちゃんが帰ってきたって奴かい。へえ。可愛いじゃねえか」

「だなあ。この嬢ちゃんに相手してもらえんなら、このオッサン見逃してやつてもいいなあ！」

「嬢ちゃん楽しませてやりやあ、食いモンたくさん貰えんだろ？」

限界だった。誰がつて、ライカリスが、だ。

その手が腰の短剣に伸びたのに気づいて、リコリスの方が慌ててしまった。

彼女が咄嗟にその手を掴むと、思い切り冷たい視線が降りてくる。

「……リコさん」

「この町の中で人殺しはやめなさい」

若干理由がずれているが仕方ない。もし安易に男たちを庇うような発言をすれば、その時は本当に止めても無駄な事態になるだろう。誰ひとり怪我なく、とは言わないが、できるだけ人死には避けた

いりコリスである。

「これくらいなら、私が自分でやるよ。多分、ここで私が後ろにいるだけだったら、舐められて後が面倒だと思う」

「殺してしまえば面倒も何もないでしょう」

吐き捨てるライカリスに、リコリスは意地の悪い笑みを浮かべた。

「殺さないよ。使い道決めたから」

「……は？」

男たちに向き直る。

散々馬鹿にされて怒りに顔が赤くなっていた。

「お話し合いは終わったかなあ？」

「言いたい放題言ってくれるじゃねえか」

それでも話が終わるまで待つてくれているんだから、根は悪くないのか。

そんなことを考えながらリコリスがゆったりと構えた時、

「お待ちになつて」

鈴を鳴らすような声がした。

男たちとは間逆で品のいい、しかし人に命令することに慣れた声だった。

第8話 宴に咲く華

酒場の出入り口をくぐる一步手前に立っていたのは、一目でこの町の人間ではないと分かる女性だった。

ふわりと広がるロングドレスで生活する人間なんて、スイエルにはいない。

きっと食糧難で引越してきた、本来なら遠く離れた王都や、大きな都市にいるはずの貴族NPCだろう。

真っ白な肌を囲む、これまた色素の薄い髪をくるくると巻いて、長い睫に縁取られた目は吊り気味でとても気が強そうだ。翡翠の瞳に浮かぶ光も強く、それを裏付けているように思えた。

左右、背後と武装した女3人に囲まれていて、目立つこと目立つこと。

（そういえば、こんな子が確か、王都の貴族街にいたなあ）

確か、ペオニア・バークマンだったか。簡易情報を表示させ記憶が正しいことを確認する。

1度クエストで関わっただけだから、彼女の方は覚えていないようだ。

もう少し若かった気がしたが、2年間で成長したのだろう。不思議な感じだった。

護衛に扉を押さえさせたペオニアは、キッと視線もきつく無法者たちを睨みつける。

男たちもそれに応えて彼女に向き合い、護衛の女たちも殺気立って、一触即発の気配が色濃くなった。

「見苦しいですわあ。庶民の宴に乱入して暴力を振るい、拳句この

ような小娘にあの下品な発言。耳が穢れるかと思ひましてよ」

「乱入してんのはてめえも一緒だろうが！ お高くとまりやがって、落ちぶれた貴族風情がよお」

なんだこれ。

急に置いていかれた感の強いリコリスの耳元に、ライカリスが顔を寄せた。

「例の馬鹿同士です」

「あ、あー、これが……」

馬鹿同士でぶつかり合って、ライカリスに放置されたという人々か。

単体だと乱暴だったり我侭で偉そうだったりと迷惑だが、片方が住民に手を出そうとすると、何故かもう片方がそれに絡んでくるといふ。

男たちのレベルは20くらい、護衛の女たちのレベルも20くらい。完全に拮抗している。

普通護衛というともっとレベルが高そうだが、これで務まっているところを見ると、男たちが意外と強いということか？

ヴェルデドラードの、プレイヤーのパートナー以外のNPCレベル事情を思い出しつつ、リコリスは彼らのやり取りを眺めていた。

護衛は一言も発していないので、ペオニアが男3人を相手取っているが、そろそろ子どももの喧嘩だこれは。

困った視線をサマンに向けると、同じく困った視線が返ってきて、一層困惑する。

ライカリスは既に興味を失ったようで、そっぽ向いているし。

放っておけば、これはきっと朝までコースだろう。いくらなんでも迷惑だ。

そつと蝙蝠ポーチをつつけば、空気の読める（？）蝙蝠は、彼女

の望む物をゆつくり吐き出した。

ステッキ
杖だった。

短めの、真っ直ぐな木の棒の先端に小さなカボチャ頭がついている。リコリスが静かに杖を構えれば、カボチャ頭が淡く光り始めた。

【スキル選択】

【戦闘妖精ナイト召喚】

【戦闘妖精ポーン10体同時召喚】

【スキル発動】

ぶわ、とりコリスの周囲を風が渦巻く。

喧嘩の真っ最中の人々をぐるりと取り囲むようにして咲いた、半透明の大きな花の数は11。

花はくるくると回転して、その上に現れたのは、リコリスにとっては馴染みの妖精たちだった。妖精といっても、大きさは家妖精たちのように可愛いものでなく、大人と変わらない。

輝く鎧を纏うナイトとポーンは妖精師が召喚する中でも前衛役だ。そのレベルと数は召喚主の職業レベルに由来するが、リコリスが召喚した場合、そのレベルはいずれも1000。一番弱いはずのポーンですら、上位層とされるレベル800のプレイヤーと互角に戦える。

驚いた人間たちに騒ぐ間も与えず、ポーンたちが剣を構え、彼らを取り押さえた。

戦う術をもつ男たちと護衛には強く対応がなされた。瞬きひとつの間に、腕と足を取られ、床に押さえつけられ、首筋に剣が当てら

れる。

予想もしていなかった展開に硬直したペオニアに、正面に立ったナイトが槍を突きつけた。

声も出ない様子の彼女の顔が、恐怖で歪むのを見て、護衛たちが呻き声を上げた。

「お嬢様……！」

実力はともかく、主人を思うその心意気は護衛の鑑。内心で賞賛しながら、リコリスは静かに声をかけた。

「大人しくしていれば、これ以上は何もしないよ」

進み出たリコリスの目には、怒りも嫌悪もない。

「こんばんは。今日スイエルの町の牧場に戻ってきた、リコリスです」

とりあえず自己紹介をしてみたら、リコリスはペオニアが泣きそうなのに気がついた。ナイトを見て、軽く手を振る。

「ナイト。槍を引いて」

命令に従って引かれていった槍に、やっと息をついた彼女は、それでもまだ唇が震えて、声が出ないようだった。

でも座り込まず気丈に立っていられるだけでも、相当凄いと思う。

「ここは私の大切な町なの。出て行けという権利は私にはないし、別に言うつもりもないけど……」

一旦言葉を切って、リコリスは周囲を見回す。
酒場の中と外と、町の人々がじつと彼女を見守っていた。

「これ以上町の人たちに迷惑をかけるつもりなら、相応の対応をとらせてもらう。言っておくけど、あなたたちでは私の相手にはならないよ」

分かってもらわなければならない。意外と憎めない人たちだから、尚更。

そう思いながら、リコリスは気がついていて。男のひとりが押さえられたまま、どうにかして動こうとしていることに。

その男の上にいるポーンに視線を送ると、忠実な妖精は僅かに力を弱め、男が動けるように剣を少しだけ下げた。もちろん、頭に血が上っている男に、気がつかれない程度に。

果たして、それをチャンスと見たのか、あるいはリコリスの思惑通りに男が動いた。

腕を大きく振って、懷から取り出した何かを、彼女に向かって投じる。

「くらえ！」

(……ナイフ。攻撃力5かぁ、すっごい初期装備だけど)

レベル差のある相手からの攻撃だからか。止まって見える、とは言い過ぎかもしれないが、見切るのに苦労はしなかった。

リコリスは試しに当たってみようかと考える。ゲームなら掠り傷ひとつ追わないところだが、今はどうなるのだろう。

それは、これからこの世界で暮らしていく上で重要な気がした。試すなら、今は絶好の機会だ。

だが、もし。大怪我をしたらそれはそれで困るので、ナイフの軌

道を考え、頬に掠めるように微調整して……。

（あれ、でも……それってやってもいいこと？）

不意によぎる、疑問。

たいした怪我じゃないとか、ちよつとくらい怪我をしても平気だとか。こういった行為をライカリスに絶対しないよう、約束させたのは他でもないリコリスだ。

多分怪我はしないと思うが、そういう問題ではない。ライカリスも納得しないだろう。

——これは破ってはいけない約束。

実際には、投げられたナイフが彼女に届くまでの僅かな時間だった。

周囲には、突然のことにリコリスが立ち竦んだように見えたのか。息を呑む音が聞こえた。

刃はもう目前だったが、それでもリコリスには余裕をもって回避できる距離だ。首を傾げてナイフを避けようとして――。

ぱし、と微かな音がして、あっさりとナイフは止まった。

あまり手入れをされているとは思えないくすんだ刀身を、横から伸ばされた2本の指が挟んでいた。

刃先は、リコリスの顔から5センチのところで留まっていた。

「……何をやってるんです」

ひどく呆れた声が降ってきた。

だが、対応が遅かったことへの非難が込められたそれ。

「いやあ、避けようか、投げ返そうか迷っちゃって」

試しに当たってみようと思ったことは、絶対に言わない。知られてはいけない。

リコリスの言い訳を聞いて、ライカリスはとても微妙な——というか呆れが更に色濃くなった表情で、彼女の前から刃を退ける。

「あまりそういうことをしないでください。怪我はしないでしょうけど……」

ひゅつとライカリスの腕が動いた。その動きは素早すぎて、何をしたのか分かったのは、きつとリコリスと彼女の妖精たちだけだった。

「ひいつ」

床に顔を押し付けられた男が短い悲鳴を上げた。その鼻先の床板にナイフが刺さっているのを見て、人々は今ライカリスが何をしたのか理解した。

「本当なら、あなたが攻撃されるところなんて見たくない。あまり遊んでいると、私が彼らを殺しますよ」

言うやいなや彼から滲んだ殺気は本物で、本気だった。

男たちを抑えているポーンや、ナイトの方が戸惑ったように主とそのパートナーを見比べている。

彼らの主は死者を望んでいないが、ライカリスが相手となるとそれはとても難しい。しかもその怒りが主の為とあつては。

光り輝く高貴な妖精が揃いも揃っておるおろとしているのはなかなか面白い光景だったが、それを楽しめる強者はこの場にいなかった。

「分かってる。ごめん、ライカ」

「……やれやれ」

凄く不機嫌そうにだが、ライカリスは譲ってくれた。

それに心底ほっとしながら、リコリスは前に出る。

敵意と怯えが交じり合った視線を受けて、しかし彼女は微笑んだ。さも余裕たっぷりであるように。

「今のところ、町の人に直接暴力とかつてないんですよ？」

一応確認だ。酒に酔って乱暴になるとはさっき聞いたが。

さっきのナイフはまあ、カウントしないでおくとして。

問われてサマンが頷く。

「何かあると、彼らは彼らで喧嘩を始めるからね。後は、お金で食べ物を買ひ上げようと強く迫ったりか」

「それはそれで迷惑なんだけどねえ」

マザー・グレースが困ったように言う。

（その程度なら、手酷く痛めつけなくてもいいかな）

しかし、罰は罰。堪えなければ、意味がない。

少し考えて、リコリスはポーンたちを見た。

「ポーン、ちょっと女の人たち擦ってみてくれる？」

『え？』

女たちの顔が強張った。

ペオニアが制止の声を上げようとするも、それはすぐに、ポーンたちの遠慮ない手によって、悲鳴交じりの笑い声に取って代わられた。

女性妖精師の使役する妖精は皆女だ。女同士なら、体をまさぐられても別にかまわないだろう。

さて、トリコリスは今度は男たちを見る。こっちはもう決めてあった。

「オジサンたち姿勢が悪いからね。ポーン、整体してあげちゃって」

男たちの顔も強張った。

やはり何か言おうとするが、にーっこりと笑ってスルー。容赦なく妖精たちにGOサインを出すと、甲高い笑い声に、野太い悲鳴が加わった。

少しそれを眺めて、リコリスはおもむろにポーチを撫でた。途端、望んだものが彼女の手に転がり出てくる。

透明な小瓶の中に紫の液体が入っていた。

目の前でそれを揺らして【沈黙薬】サイレンスジュースの表示を確認した。

それを7人全員に少しずつかけて回ると、その場が突然静かになった。

「やっぱり、うるさいと迷惑だからね」

リコリスが使ったのは、過去のイベントで使われた、かけられた者に沈黙効果を与える薬品だった。本来は魔法を封じて悪戯するための物だが、解毒薬を使わない限り効果が消えないので、今回はちようどいい。

妖精師のリコリスにはそういったスキルはないし、そもそもスキルだと効果時間があるから途中で切れてしまうから。

これで安心して朝までコースだ。

こうして、声なき悲鳴と笑い声を上げ続ける集団と、それをとて
も満足げに眺める美少女というカオスな光景が完成した。

町の人たちが若干顔を引き攣らせていたが、気にしない。罰は罰
なのだ。

第9話 一応存在する乙女心とやら

「じゃあ、すみませんけどマスター。朝まであの人たち、お願いします」

静かになった酒場の入り口で、リコリスが頭を下げる相手は、この酒場のマスター兼、宿屋の店主エフスだ。

宴会はお開きになって、ある者は陽気に笑いながら、またある者は「リコちゃん怒らせるのはやめよう」などと呟きながら、皆それぞれ家路についていた。

町長夫妻からは、ひとりの怪我人も出なかったことを感謝されたが、リコリスはにつこりと笑って、「躰はまだこれからです」と答えたとのである。

皆を見送って、リコリスはお仕置き真つ最中の7人を預かってもらえないかと、マスターに頼んだのだった。

連れて帰ってもよかったが、家は狭くて入れられないし、かといって家畜小屋や外に放置もあんまりだろう。

いくら静かだとはいえ、あの不気味な集団を預かってほしいと頼まれたエフスは、豪快に笑って頷いてくれた。日々酔っ払いの面倒を見ている彼は、これくらいでは動じない。

「おう。今日はもう店仕舞いで、泊り客もないしな。酒場の隅に置いておけばいいんだろ？」

「はい。朝一で引き取りにきます」

「任しときな」

鷹揚に頷くマスターに再度軽く頭を下げて、リコリスはそろそろ、と踵を返しかけ。

「リコリス！」

「はい？」

「これからまた、よろしくな！」

「——はいっ」

建物に入っていくエフススの背に、リコリスはもう一度、今度は深く頭を下げた。

扉の閉まる音を聞いてから頭を上げると、彼女から一步引いたところに立っていたライカリスを振り返る。

「帰ろ」

「はい」

行きと同じようにライカリスと並んで歩く、既に深夜に近い町。

昼よりもずっと涼しいが、それでも暑いことは暑い。

隣を歩く横顔には、穏やかな表情が戻り……と言いかむしろ晴れやかだ。そんなに帰れるのが嬉しいか。

（ん？ 帰る？）

はて。リコリスが帰るのはもちろん彼女の牧場だが、ライカリスはどうするのだろう。

（って、当然自分の家に戻るでしょ）

ライカリスの家はリコリスの牧場の目と鼻の先だ。

あの日常生活にも支障ある家に普通に一緒に帰ることを、欠片も疑問に思っていなかったとか、少し笑える。

「リコさん。また足が止まってますけど」
「え、ああ」

昼もこうして色々考えては、足を止めていた。
またしても立ち止まっていたことに気づいたリコリスに、ライカリスが手を差し出してきた。

「どうぞ」
「……………ありがとう」

瞳に悪戯っぽく輝く光を見たが、それには知らんぷりで、彼の手に自分の手を乗せた。
指が絡んで、歩みが再開する。

「疲れたでしょう。今日はゆっくり休んでください」
「そうだね。あ、でも」

思い出した。

「何か？」
「いや…………あの家、お風呂がない、から。温泉…………行かないと」
「…………」

微妙に咎める視線が刺さった。言葉はないが、目線が語る語る。
リコリスは俯いた。

「もう夜中ですよ？」
「うーん。そうんだけど、でも」

「こによこによ言いながら腕を持ち上げて匂いを嗅ぐリコリスに、

ライカリスが顔を寄せてきた。

そのまますすんと肩口を嗅がれて、彼女は硬直する。

「?!」

「別に臭わないですし。明日の朝、町に行く前でもいいじゃないですか」

「ぎゃああああっ!」

オイコラ。ふざけんな。

なんてデリカシーのないマネをしてくれるのか。

咄嗟に繋いでいた手を振り解いて、ライカリスの顔面を手の平で押し退ける。勢いがありすぎたのか、べち、と音がした。

「ぶ。な、何するんですか」

「うるさーいっ! あんたこそ、なんてことすんの!」

「ええっ?」

「お風呂前の女の匂い嗅ぐとかどうなの?!」

リコリスはつーんと顔を背けて、おろおろしているライカリスを置いて歩き出す。怒りに任せて、随分と早足だった。

慌てて後ろから追ってくる気配があった。

「リコさん、ごめんなさい。そんなに嫌がられるとは思ってなくて」

昼は野菜を収穫したし（ほとんど妖精がやってくれたけど）、夜は酒場で宴会で（飲んでないけど）、しかも夏だ。空調もなかった。

この条件で匂いを嗅がれたい女がどこにいる。

「別に嗅がれたことが嫌だったんじゃないのよ? いや、嫌だったんだけど……これがお風呂上りだったら好きにすればって感じだけ

ど！」

今はダメだ！　ないわ！

足の長さが違うからか、かなり早足のリコリスに悠々とついてくるライカリスは、しきりと首を捻っている。

「そんなに気にしなくてもいいじゃないですか。全然汗臭いとかもなかったですし、リコさん普通にいい匂いですよ？」

いい匂いつてなんだ、いい匂いつて。

「だからそういう問題じゃないつてば。ふんだ。いいもんね。ライカもう家に帰りなよ。私1人で温泉行ってくるから」

「え、い、嫌です。ダメですそれだけはっ」

「知ったことがーっ」

帰れと言われてもついてくるライカリスは、宴会の時とは正反対に表情豊かだ。あの時の無表情や不機嫌な顔が嘘のように。

そのことにこっそり安堵しているリコリスだったが、教えるつもりは全くない。

「じゃあ、脱衣所の前で待ってますから！」

その提案に、リコリスは思わずライカリスを見上げた。
少し冷静になって、顔を顰める。

「……そこまでしてくれなくていい」

牧場近くの天然温泉には、誰が造ったのか、小さな脱衣所が設けられていた。他は囲いも何もなく、周囲は森だ。

しかし、きつとりコリス以上に疲れているだろうライカリスは、苦笑して首を振る。

「ダメですよ。こんな時間にあなを、あんな森の中でひとりにするなんて」

「……」

女心は理解してくれないくせに、こういうことは心配するのか。心配は素直に嬉しいけど、できたら逆がよかった。

だって夜の森くらい、リコリスにはなんでもない。妖精を呼べばいいのだから。

怒りがだんだん諦めに姿を変えていく。

「——分かった。そしたら、温泉やめるから、ライカの家のお風呂貸して」

「え？」

進入可能なNPCの自宅には、ここまで細かくやる必要あるのかというくらい、オブジェクトが付属していた。

キッチンがあったし、もちろんお風呂も。

ライカリスの家は小さいが、例外ではない。

これから温泉に向かってそこで待たせるより、彼の家に直接向かった方が負担が少なそうだ。ついでに言えば、温泉に行くよりそちらに行く方が近い。

「それはかまいませんが……」

「もう直接行っている？　そんで、石鹸とかタオルとか貸してください」

お宅訪問だ。しかもかなり図々しい系の。

「ごめんね、妖精ちゃんたち。帰るの少し遅くなります。」

「分かりました。じゃあ、ちょっと道を逸れますよ」

町の外れから、ライカリスに案内されて森に入る。彼の家までは道なき道だ。

だが覚悟して足を踏み入れた森は意外と暗くなかった。否、暗いことは暗いのだが、うつすらと見通しがきくのだ。少なくともどこに木があるのか判別できる。

もつと真つ暗で何も見えなくなるかと思っていたが、どうやらゲームと同じ程度には見えるようだった。

少し見えていたら楽に移動できるだろうが、それは贅沢というもののだろう。

ウィザード

職業に魔法使いを選んでいたら周囲を照らす魔法も使えたが、もちろんリコリスにそんな魔法はない。

確か、【松明】がポーチの中に入っていた。出すべきか、とりコリスが考えた時。

「失礼」

「え——わわっ」

振り返ったライカリスが、リコリスを両腕に抱え上げた。

「ちよっ」

「暗いですから、この方が安全ですよ。掴まっててくださいね」

そう言つて、リコリスの返事も聞かずに動き出すので、彼女は慌てて目の前の首にしがみついた。

長年森で暮らしてきただけあって、リコリスの目にはうつすらと見えるだけの木の根や枝をひよいひよい避けて、軽々と進んでいく。

リコリスが普通に歩くよりも速いくらいだった。

「顔、伏せておいってください。葉が当たるといけませんから」

そんな忠告もされたが、結局そんなことは一度もないまま、ライカリスは彼の家に辿り着いた。

といっても明かりがないので、リコリスの目には何となく小屋らしきものがある気がする程度にしか見えないが。

迷いない足取りのライカリスが家に入ると、突然視界が明るくなった。

「う」

眩しい。リコリスはしばしばする目を擦る。

「大丈夫ですか？」

「うん……」

待つことしばし、ライカリスはリコリスの目が慣れてから、彼女を降ろした。

自動点灯したランプに照らされた室内は……不穏で怪しげだった。

ライカリスの仕事は他称薬師だ。

妙な薬を調合したり実験したりが好きで、森の中に引き籠もって色々好きにやっていたら、どこからか聞きつけた人間がその薬目当てにやってくるようになったらしい。

いつの間にか薬師として認識されるに至ったが、本人曰く「いい迷惑」だという。

そもそも滅多に人に会わないから仕事として成り立っているのか微妙なところだが。

そんなわけで、家の中は実に怪しい。

変な形だったり干乾びたりしている謎の植物が、天井から吊り下がりが、壁に貼り付けられ、机の上に鎮座している。毒でも付いていそうな大量の本は、本棚に入りきらずに部屋の隅に積みあがっているし、実験用のビーカーもいたるところに置いてある。しかも紫や水色の液体つきで。

ゲームで見慣れたと思っていたが、いざ目の前にあると相当のインパクトである。

「相変わらず、アレな家だよね」

もつと綺麗にしてそうな印象があるライカリスだが、家の中はどろくえんに見ても乱雑。

昨日の洗い物が残っているとかいう汚さではないが、これもどうだろう。

当の本人は特に気にしていないようだ。

「リコさんは見慣れているでしょう？ 2年前から、特に変わっていないですよ」

「そうだねえ」

怖くて掃除したいけどできない家のままだ。

立ち尽くすリコリスを、ライカリスが促した。

「必要なものは全部浴室にありますから、好きに使ってください」
「うん、ありがと」

変な草を避けながら進んで、リコリスは浴室の扉をくぐった。

「はふ」

温かいお湯に包まれて、リコリスは満足げな吐息を零した。
置いてあった石鹸をありがたく使わせてもらって、全身磨き済みだ。

これでいくら嗅がれても大丈夫。ドンと来い。

浴室は普通に綺麗にされていた。むしろさっきの部屋が異界だったのだが。

入ってすぐのところに小さな脱衣所があって、その隣が今リコリスが入っている浴槽だ。

横の壁には彼女が知るものと同じ形の水道があるが、ひとつだけ違うのが、壁に繋がっている箇所、赤い石でできた輪が付いているところ。

リコリスの家のキッチンには、これはなかった。

「どうやらこれがお湯を出すのに重要であるらしいと思いつたのは、どうしたらお湯が出るのか素裸で散々悩んだ後だ。」

見慣れない物がついていたので触つてみたら、その赤い石は微かに輝きを發して、結果お湯が出たのである。

「魔法かなあ。明かりも火じゃないんだよねこれ」

頭上で輝くランプを見上げる。もちろん電気でもない。宿屋で宴会の準備が整うのを待っていた時も、暗くなったら明か

りは自動で点いた。

そういえば、ゲーム中でも日が暮れると勝手に部屋が明るくなっていたが……。

「訊くに訊けないしなあ。後でこっそり調べてみないと。——さて」

あまり長湯しても迷惑だろう。

お湯から上がって、脱衣所の棚に置いてあったタオルを取る。

わしゃわしゃと頭を拭きながら、何気なく彼女が先ほど脱いだ服に視線を落とした。

(……ん?)

あることに気がついて、温まっただはずの体がすーっと冷えていく。リコリスは意味もなく下を見て、上を見て、それから虚しく首を傾げた。

「……着替え、ないじゃん？」

迂闊。というか。

(こんなとこばかりリアルなお約束とかいらんわーっ！)

……声に出さなかった叫びは、どう考えても自業自得だった。

第10話 長い1日の終わり

——しかし救世主は存在した。

リコリスが途方に暮れていると、棚に置いてあったポーチが突然震えだした。

蝙蝠が口を開けると、服が上下揃ってでろんと出てきて、更にその上に下着が一揃い吐き出された。

「おお?!」

慌てて広げてみると、それは彼女がゲーム中でいつか見た目にした。うかもしれないと思ってそのまま忘れていたファッション装備だった。

『アクティブファーム』では見た目用素材のファッション素材が存在し、性能重視の一般装備に外見だけを移植できるようになっていた。

そしてその装備品を全て脱ぐとあられもない下着姿になるが、それにもオシャレ下着なるものが存在する。

リコリスが着ていた服は、袖がふんわりした丈の短いジャケットの下に、後ろ側が蝙蝠の羽をデフォルメしたようなギザギザしたワンピース。前が短いそのワンピースの下にはショートパンツと蜘蛛の巣の柄の入ったレースのレギンスを履いて、と趣味に走ったものだ。

普段はつけないが、戦闘中に被る頭装備は小さなカボチャ帽子だった。

ブーツと下着も含め、全体的に黒で統一されている。

プレイヤーたちは皆それぞれ見た目にこだわっている者も多く、

リコリスの友人には黒のボンデージ、網タイツにピンヒールときて、武器まで鞭に変えていた者もいた。あれは胸の谷間が眩しかった。ただしそんな中でも、中身の性能は鬼畜と称された装備なのだ。

リコリスは蝙蝠を見る。なんて気の利く鞆なのだ。感動させてもらった。

吐き出された服には装備性能は皆無だが、だからなんだ。服があるだけいい。

いざとなったら脱いだ服を着るという手もあったが、あまりやりたくないし、ライカリスに助けを求める……のはもつと嫌だ。

「所持品に入れててよかった……。ありがとう蝙蝠……」

新しい服はタイトなワンピースに無地のレギンスで、メイン装備とは反対に落ち着いた見た目だった。

落ち着いて、リコリスは今度はしっかり髪を拭いた。

浴室を出ると、椅子に座って本を読んでいたライカリスが顔を上げた。リコリスを見て、きょとんとする。

「どうかした？」

「いえ。初めて見る格好だったので……髪も濡れているから、なんだか別人みたいですね」

「そうかなあ」

諸事情により、性能にも見た目にもこだわっていらなかったが、リコリスとしてはなかなか可愛いと思って取っておいた服だ。

結局ゲームでは出番がなかったが、今は大活躍である。

「変？」

「いいえ、可愛いです。普通の女の子みたいです」

「どういう意味かな、ソレは」

「普段は普段で素敵ですよ？」

つつこみたい。ついでにデコピンのひとつもくれてやりたいが、しかし風呂の恩がある。

リコリスは耐えた。

「聞かなかったことにする。とにかく、お風呂ありがとね、ライカ」
「……」

礼を述べれば、本をテーブルに置いたライカリスがリコリスに近づいてきた。

「——リコさん」

静かに名前を呼んだ彼は、不安と期待の入り混じった、複雑で真剣な表情を浮かべていた。

「お願いがあります」

そんなに緊張するお願い事とはなんぞや。

緊張が伝染してきて、リコリスもじつと目の前の顔を見上げる。

「あの……、」

「う、うん」

「私、リコリスさんの牧場に引越したらダメでしょうか……」

「え、いいよ？」
「えっ？」

気が抜けて、随分あっさりした返事になった。

ただし問題はある。

誰かが壊した扉もないしな。

「お金貯まったら増改築するし、それからの方が」

「いや、それがそうでもないっていうか」

101

彼の部屋を造るとして、その部分を負担してもらうのはありだとは思うが。仮に折半だとしても、今のリコリスにはそれだけの所持金もないのだから。

「全額負担するので一緒にいさせてください、って言った方が分かりやすいですかね」

「なんだそれ……ちなみに引越し希望日はいつ？」

訊いてみれば、ライカリスはにっこり笑って。

「今すぐにでも。心配しなくても、私結構持ってますし」

どれくらい、これくらいと、その金額を聞いて、リコリスは思わず男の首を絞めた。もちろん本気ではないが。

しかし土地を買う前のリコリスより金持ちなNPCって、なんだ。

「サツイガワイタナー」

「そんな棒読みで……リコさんは牧場ごと引っ越しましたからねえ、相当かかったでしょう。私は近くに越してきてもらえて嬉しかったです、けど」

どうやらその直後に2年前の異変があったらしい。

ライカリスの表情が悲しげに曇る。それを見て、リコリスは改めて理解した。

——ああ、この男は、本当に不安なのだ。

どこにも行くなと、隣にいてくれと言った、あの顔を思い出す。

「はあ……。じゃあ、金銭問題は保留で。狭くて不自由満載でいいなら——うちにおいで、ライカ」

「っ！ 嬉しいです。もう本当に、床でも外でも牛小屋でも！」

「いや、それはもういい」

今度こそデコピンをお見舞いした。

引越しそのものは実に簡単だった。

家にある物は好きに持っていていいとライカリスは言ったが、

……本気でいらない。

きつと大多数がリコリスの手に負える代物ではないから。

引っ越すといっても短い距離、後ほど本人に任せるのが一番いいだろう。

部屋の隅にあったベッドだけ、ぐわつと吸い込んで終了だ。

そうして、ライカリスの入浴の後、とてもご機嫌な彼に行きと同じく抱えられ、やっと牧場に帰ってきたのは午前2時だった。

しんとしている牧場。

畑を見ればきちんと種が蒔かれていて、しかし肝心の家妖精たちがいない。

もしかして召喚に制限時間があるのだろうか。ゲームではなかったが、と不安になったところで、ライカリスがリコリスを手招いた。

「リコさん」

静かな声で、指し示すのは家の中だ。

「あー」

覗き込んだ家の中、部屋の隅のリコリスのベッドの上に折り重なるようにして、妖精たちが寝息を立てていた。

部屋に入れば明かりがついて、リコリスは少し焦ったが、妖精たちはよく寝入っているようで欠片も起きる様子がない。

（可愛いけど、これ下の方潰れてない？）

狭いベッドに20人、いくら小さいとはいえ、苦しそうだ。

「……ライカ」

小声で名を呼び、目線で問えば、ライカリスは苦笑して頷いた。リコリスは音をさせないように持つてきたベッドを取り出し、エンドテーブルを移動させてから、彼女のベッドにぴたりとくっつけた。それから2人で、上の方の妖精たちをそちらに移動させる。まだ狭いが……まあ許容範囲だろう。これ以上はどうしようもないし。

（結局床で寝ることになるんだなあ）

さっきのあれはフラグだったのか。

夏だし、風邪も引かないだろうから、別にいいのだけど。

床に座ってベッドに背を預け、隣に並んで座ったライカリスを見れば、同じことを考えたのか、くすくすと笑っている。

幸せそうで何よりだ。

ちょうどいい高さの肩に頭を預けて、リコリスが目を閉じると、しばらくして明かりが消えた。どういう仕組みになっているのかいまいち分からないが、今は考えても仕方ない。

何より、今日はもう寝るべきだ。

（だって、きつと明日も忙しいから）

大きな手が頭を撫でてくれるのを気持ちよく思いながら、リコリ

スは意識を手放した。

おまけの話 1 とあるブツタイのキモチ

オレサマのゴシユジンは、ボクジヨウをケイエイしているが、まだわかいコムスメだ。

ある日のこと、ゴシユジンはいつもどおりに、ボクジヨウにたっていた。

カンペキなオレサマとしたことが、なぜかそのチヨクゼンのキオクがすっぱりぬけていた。

それはゴシユジンもおなじのようで、やたらとコンランしていた。すこしコンランしすぎなほどに。

しばらくして、ゴシユジンのイヌがやってきた。

ゴシユジンのことがだいすきなイヌだ。

ヤツはゴシユジンのためならしねるってくらい、ゴシユジンがすきだ。

イヌはゴシユジンのイエのイリグチをぶっこわしてはいつてくると、ゴシユジンにだきついて、なきだした。

アホだとおもう。

アゲクに、ゴシユジンやゴシユジンのナカマ、ボクジョウがセカイからきえたとかいいだしやがった。

ニネンもたつてゐるらしいぞ、オレサマたちがいなくなつてから。

ゴシユジンはイヌのセツメイをむずかしい力オできいていた。

そりゃそつだ。

それから。

しなびてたイヌをすこしやすませたゴシユジンは、マチにいくつてんでヤサイをシュウカクした。

やったのはほとんどヨウセイどもだけだな。

オレサマもちよつくらてつだつてやった。

マチにいつてからも、イロイロやったぜ？

ゴシユジンのヤサイをエンリョしようとしたジジイもセツトクしてやった。

オレサマはクウキよめるからな。

ゴシユジンがたたかうのも、てだすけしてやれる。

さすがオレサマ。

ところで、イヌはニジュウジンカクだともう。

だが、オレサマにもよくわからんこともある。

それは、ゴシユジンとイヌのカンケイだ。

マエからおもっていたが、おまえらなんなんだ。

なんでそれでコイビトドウシじゃないのか、コイチジカンといつめてやりたいわ。

ナカよくテとかがぎやがって、おまえらそれコイビトつなぎだろ。

おまえらまじなんなの。

たのむから、さっさとくつつけ。

それができんなら、そこへなおれ。

オレサマがセツキョウしてくれる。

それがダメならせめてシツコミいれさせてくれ。

……ああ。

コトバをはなせたら、ラクなものなあ。

第11話 新たな1日と生活の始まり

意識が浮上した。ぱち、とやけにはつきり目が開いて、おかしいなと彼女は思う。

（……こんなに寝起きよかったっけ？）

まだ若干霞みがかっている頭で、もう少し寝ていたいと思い、いやもう時間だ、働かなければ、と考える自分がいる。

（――働く？　だって私の仕事は）

さつと頭の中の霞が晴れた。眠りの余韻が遠のいて、室内の光景が意識の内に入ってくる。

外はもう夜ではない。完全に明けたわけではなく、しかし太陽が顔を見せる前の、夜と朝の間の時間。

彼女――『リコリス』の一番好きな時間帯だった。

時刻を確認した。午前5時5分。

本来のリコリスなら、目覚ましもなくこの時間に目が覚めることはあまりない。彼女の仕事は時間で拘束されるものではなかったから。

昨日が色々ありすぎたからか……あるいは、とりこリスは考え、思考をやめた。

彼女の推測は、明日明後日、そしてそれから先と、朝を迎えなければ検証もできない。

（起きよう……）

牧場を見にいかねければ。

とりあえず畑の様子を見たかった。

この世界の作物の成長スピードを把握しておくためだ。ゲームと同様ならその全てのデータを彼女は記憶しているし、飢えることもないだろうが、そうでないなら計画を立てる必要がある。

そして、動物たち。

昨日の夜、戻ってきた時には牧草地に動物たちの姿はなかった。

日が暮れて妖精たちが小屋に帰してくれたのだろう。彼らをまた外に出さない。

それから朝ごはんを用意して……そういえば後ろでまだ寝息を立てている妖精たちは、花の蜜が主食らしい。少なくともゲームの中では。

それならば所持品の中に何種類も大量に入っているはずだが、本当に人間と同じものを用意しないでいいのだろうか。

その後は、また町だ。

妖精たちに留守を頼んばかりで心苦しいが、約束もあるし、今日は早く帰ってくるということで見逃してもらおう。

昨日に引き続き、結構な過密スケジュールだ。

「……リコさん、起きてます？」

すぐ近くで声がした。

「うん。おはよう、ライカ」

「おはようございます」

昨夜、ぴったりとくつついて眠ったパートナー兼同居人は、リスが起きたのを察して、静かに声をかけてきた。

多分無理だとは分かっていたが、リコリスとしてはもう少し寝させてあげたかった。何せ、就寝時刻が2時過ぎだったのだから。

「私起きるけど……ライカまだ寝てる？　寝ててもいいよ」

むしろ寝ててくれ。

無駄だと知りつつも、念を込めて提案する。

「いえ。お仕事でしょう？　手伝わせてください」

言いながら、ライカリスはちら、と妖精たちを見た。

ぐっすり眠っている。これを起こして手伝いを、と要求できるか？　それは絶対無理。

「じゃあ、お願いしようかな」

今日もつと早く就寝して、しっかり休めるようにした方が、これ以上頑なに断るよりも建設的だ。

そう判断したリコリスは、ライカリスと共にそつと家を出た。

■ □ ■ □ ■ □ ■ □

——午前8時半。

リコリスたちは寝坊したと慌てて起きてきた妖精たちに牧場を任せ、町に出ていた。

ちなみに妖精たちの朝ごはんは、花の蜜で間違っていなかった。一番人気で取り合いになったのはラベンダーの花の蜜だった。

「酒場に行くんじゃないんですか？」

ライカリスが不思議そうに聞いてくる。

リコリスが迷わず進むのは、酒場への道ではない。

「行くよー？ でも準備も大事でしょ」

昨日、男たちを捕獲したときから考えていた。

考えたはいいが、それはある人物の了承を得なければ進まない。

最初真っ直ぐに酒場に向かうつもりだったリコリスは、思い直してまず先方に頭を下げに行くことにしたのだ。

見えてきたのは、トンテンカンと音を響かせている、小さな作業場だった。

リコリスは入り口から中を覗き込んだ。

「すみませーん。サイプレスさんいますかー？」

——午前9時。

「うわぁ……」

酒場に着いて、マスターに挨拶したりリコリスは、今日町に出た本来の目的に向き合って、うっかり妙な声を出していた。自分でやっておいてこの反応はどうかと彼女は思ったが、出てしまったものは仕方がない。

まだ開店前の酒場の隅に、昨日の7人はいた。その様子は……筆舌に尽くしがたい。

一言で言うなれば、憔悴、だろうか。

全員既に押さえられずとも床にべったりと倒れ伏し、弛緩した体が時折痙攣していた。

「あ、あ、あんた……じぶ、自分で、やらせ、たくせ、に……」

男の1人が顎を床に擦りながらリコリスを見上げ、そこまで言うてまた力尽きた。

ライカリスがそんな男を冷たく見下ろす。

「はっ。それだけ言えるなら十分元気じゃないですか。なんなら、私がトドメ入れましょうか？」

吐かれた毒に、全員の肩がびくりと揺れた。どうやら皆意識はあるようだ。

そんなライカリスの肩を軽く叩いて、リコリスは怯えている彼らを見つめる。

どういうわけかHPが半分ほど減っていた。

【スキル選択】

【回復陣】 ヒーリングサークル ブリスト

【スキル発動】

7人の下の床に、大きな魔法陣が現れた。白い輝きを放つそれは、
ブリスト
神官の回復スキルのひとつだ。

パーティを組まなくても、指定した範囲で複数人を癒すことがで

きる。

観察していると、魔方陣から放たれた光は7人に柔らかく纏わりついて輝きを増し、それからゆっくり弱まって消えていった。

全員、HPが最大まで回復しているのを見て、リコリスはほっとする。

怪我をしていたわけではないので、何を治したのかいまいち分かっていなかったが。

そろりそろりと頭を上げる7人を、リコリスは腕組みして見下ろした。

「じゃあ、皆さん。回復したところで……何か言うことは？」

問われた7人は、仲が悪かったのも忘れたのか、顔をつき合わせて会話を始めた。

依然として、床に這いつくばったままで。

「な、何か？ 何かってなんだと思う？」

「なんでしよう……全然分かりませんわ……」

「謎かけでしょうか？ 何か別に意図があるのでは……」

「俺頭悪イからよお……」

（え、そんな悩むこと？）

リコリスは頭を抱えた。

彼女の後ろでは、ライカリスは蔑むように7人を見ているし、エフスは笑いを堪える表情で口をパクパクさせている。「悪いことした時に言う言葉だろ！」と。

ヒントに気づかないまましばらく相談していたが、ようやく男が1人、エフスを見た。

「——はっ！」

それは一瞬で全員に伝わって、目を見交わした彼らはリコリスの方へ体を向けた。

無論這ったままなので、額は床についたままだ。変な光景だが、見ようによつては土下座に見えなくもない。

『せーの……ごめんなさいっ！！』

これはきつと進歩なのだろう。意外と素直で、これからリコリスがやろうとしていることにも希望が持てる。

「……反省した？」

ツツコミ入れたいと、うずうずする心を無理やり抑えつけて、リコリスは問う。

「町の人に乱暴を……直接的な暴力じゃなくても、脅したりとか、お金で圧力かけたりとか、もうしないって約束できる？」

具体的に言えば、うんうんと頷きが返ってきた。
では、これで第一段階終了だ。

「じゃあ、あなたたちのこれからのことだけだ」

言えば、全員の背が強張った。

一晩中整体と、櫛り刑はそんなに堪えたのだろうか。
そんなことを考えながら、リコリスはふと、ひとつ重要なことを

思い出した。

「——ああ、その前に、皆で自己紹介しようか」

リコリスは彼らの名前を知っている。ペオニアを始めとして、全員確認済みだ。

だが、人間関係の始まりには、まずそこから、お互いを知ることが必要だ。

彼女は床に正座し、7人に向き合った。

「では改めて。リコリスです。町の南で、牧場やってます」

リコリスがそうして軽く頭を下げれば、ひどく当惑した視線の後、もそもそと体を起こす音が聞こえたと思ったら、全員が彼女を真似てか正座していた。

代表して、まずペオニアが深々と頭を下げた。

「ペオニア・バークマンと申します。この度は大変ご迷惑をおかけ致しました」

ペオニアの護衛たちがそれに続き、最後は男たちが慣れない仕草ながら謝ってきた。

彼らの名前は護衛側がアイリス、ジェンシャン、ジニア。姓は皆セルベアで姉妹なのだという。

男たちはチェスナット、ファー、ウィロウと名乗った。

「よし。じゃあ本題に入るよ。まずチェスナット、ファー、ウィロウ！」

『はい！』

あえて呼び捨てにしたが、特に不満はないようだ。いい返事が返ってきた。

「あなたたちには働いてもらいます！」

宣言すると、男たちはポカーンとした。何故。

まともに仕事をせずに食べ物を使ったり、森で木の実などを拾って暮らしていたと聞いたから、まず働けというのはおかしいことではないはずだ。

腑に落ちないが、リコリスはとりあえず考えていた計画を口にした。

「まず朝一で私の牧場を手伝って、それが終わったらサイプレスさん——この町の大工さんのところで働いてもらいます。これは先方にもご了承いただいてます」

サイプレスは生産スキル伝道師の1人で、木工を担当していた。町の大工さんだ。

リコリスにも下心がないわけではないが、そもそも女性には預けられないし、体力もありそうだし、厳格で男たちよりも体格のいいサイプレスに頼むのが一番だろうと思ったのだ。

「夕方まで働いたら、牧場に帰ってきてもらって、晩御飯の後は修行！」

『修行?!』

「そう修行。戦ってみた感じ、ちょっと心許なかったから。もう少し強くなってもらおうと思って」

いずれは町を守る立場になってくれればいい。

スイエルの町には戦える人間がライカリス以外にいないから、レ

ベル持ちは貴重だ。

「あと、悪いけど給料はお金じゃなくて現物支給。食料毎日3食分調理済みで、おやつもほどほどには認めます。なんでお金じゃないのかつて？ それは私が貧乏だからです！」

指摘される前に言っておく。

まあ世界的な食糧難だというこのご時世、リコリスの牧場の作物ならいいお値段のはずだから、悪くない条件……だと思いたい。

「……不憫」

誰かがボソリと言った。リコリスは悲しくなった。
チエスナットが首を傾げる。

「でもよあ。牧場主ってったら、皆金持ちじゃねえのか？」

「……手持ち4桁ですけど？」

「……おおう……」

聞いた側が言葉を失った。

大量のアイテムを所持しているリコリスだからなんとかなるが、普通に暮らそうと思ったらどう考えてもアウトな所持金だ。

ライカリスがため息をついた。

「本来牧場は町のワープゲートの先にあるものなんですよ。リコさんはそこから、この町の南の土地を買って、牧場を移動させたんです。そうすることでスイエルの町の牧場として認められ、お互いに利益がありました」

「へえ、そんなことできるのか」

「では、その土地代が高かったのか？」

アイリスが問い、ライカリスが頷く。

「あの土地は、1兆Bでした」

Bはこの世界の通貨の単位で、バルと読む。予想外の単位に、7人全員が目を剥いた。

ちなみに0をつけて表記すると1,000,000,000,000,000,000Bとなる。眩暈がする金額だ。

リコリスはゲーム内でも有数の廃人だったが、そのリコリスが儼然に儼約を重ねて、必死で貯蓄しなければ稼げなかった。

彼女の牧場レベルがカンストせず900で止まっているのは、キヤクターの成長や重要なクエスト、あるいはこの土地を買うために必要な条件以外の増改築をケチったからだ。

土地を買うにしても、もう少し余分に貯金してから実行すればよかったのに、と友人たちに散々言われたが、リコリスは今更ながらそれを痛感している。

「すつげえな……いろんな意味で」
「でしょ？」

もういい。リコリスは開き直った。

「で？ どうする？ もちろん、他に働き口の希望があるなら、無理のない範囲で私が交渉してみるけど」

男たちは顔を見合わせ、一拍。

『よろしく頼みます、師匠！！』

「師匠?!」

——予想外の呼ばれ方だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3811z/>

ヴェルデロードで牧場生活を

2011年12月26日15時48分発行